俳　句　雑　誌

水　明

2024　4月号

令和六年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七巻第四号

《今月のかな女》

草原の軍樂隊や櫻咲く

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

「草原」は「くさはら」と読みたい。「そうげん」ではこの句の雰囲気に合わない。日本帝国の軍隊に勢いのあった昭和初期の俳句で、「軍樂隊」が厳めしいが、下五の措辞により、一般国民にも通じる明るさがある。桜の咲く時期に某地の野原で何かの行事があり、軍樂隊が盛り上げ役になっているのだと思う。今なら、警察や自衛隊の音楽隊に相当するであろう軍樂隊が、どのような曲を演奏していたのか大いに興味がわく。

（鬼之介・註）

水　明

第1123号

―華の一句―

早立ちに道連れとなり春の月

上戸千津子

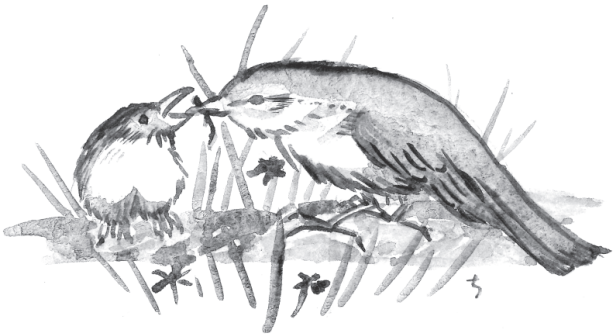
江戸時代に、急ぎ旅や途中の宿場を飛ばす目的で夜が明けぬ内に旅籠を出発することを「早立ち」と言った。そのことを思い描いてこの句を読むと、道中合羽に身を包んだ股旅者に連れ添う三味線を背負った鳥追い女の旅姿が浮かんでくる。何かの用事で日の出前に家を出た作者に、春月が寄り添っている。なんとも粋で艶のある「道行」である。

（鬼之介・推薦）

水明

令和６年
４月号

今月のかな女
華の一句
玉杯（作品） 山本鬼之介 4
麗日（近詠） 石山かつ子 6
梅日和（近詠） 鈴木康世 7
煌星 ※雪欄作家近詠鑑賞 正木萬蝶 8
ゆずり葉 ※季音月評 檜鼻ことは 10
季音「雪」（同人作品） 網野月を 石井喜恵 石山かつ子 ほか 12
季音「月」（同人作品） 町野広子 梅澤佐江 大場順子 ほか 19
季音「花」（同人作品） 野田静香 河野はるみ 檜鼻ことは ほか 24
『水明誌』を繙く 石口栄 29
現代俳句鑑賞 網野月を 30



三月号の巻頭句　32
俳誌望見　染谷風子　33

水明集

新暦文　菅原卓郎
菅原真理　ほか　34

水明集作品評　山本鬼之介　46
水琴窟（水明集二月号鑑賞）　池田雅夫　50
鼓笛集　52
句集喝采　曲淵徹雄　55
山紫集　56
水明忌の記　日髙道を　62
水明の記事掲載他誌より転載　64
水明例会報・各地句会報　67・70
全国大会のお知らせ　77
風声・発展基金御礼　78
後記

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

玉杯

山本鬼之介

曲り佳き友禅の川冴返る

求人のビラが飛びゆく春田かな

半ドンは昭和の遺物さくら餅

春月や古城を偲び馬上盃

春塵をかさね鉄砲狭間かな

長き日や「残日録」といふ日記

ペアルックきめて弥生の遊歩道

春炬燵足で挨拶して去ぬる

麗日

石山　かつ子

琴を弾くからくり人形春の街

藩校の開け放たれて梅白し

大手門の乳鋲に錆や草萌ゆる

城町のここもT字路梅の花

この町に生まれ嫁ぎて雛飾る

強東風や武具となる紐濃く染めて

雛職人の口一文字や紅を引く

雛のまちに住んでいながらなかなか歩く機会がない。ちょうど「まちかど雛めぐり」を行っているので、ゆっくりと廻ってみることとした。どの家も自慢の立派な雛人形を外から見えるように飾ってある。享保雛、屋敷雛、木目込、現代の茶髪の雛まで……それぞれにボランティアの人達がていねいに説明をしてくれる。

今年は「訪れてみたい日本のアニメの聖地」に選ばれたので地図を片手にぶらぶら。雛のまちもなかなかにぎわっている。

梅日和

鈴木康世

梅匂ふ野面積みなる坂の家

恬淡と生きし姉なし梅の花

日溜りの椅子を分け合ふ梅日和

野梅咲く豊かに流るる水の音

撞く鐘の静かな余韻梅の里

錫杖は釈迦の身の丈梅香る

梅詠みて結句の一語書きなづむ

今年に入って身辺整理を始め、今日は文筥をと取り出した手紙の束、俳句を始めた頃の一寸と読み出したら次から次と読み耽る事に。

あの頃は全部手紙だった。沢山の事を書いて教えて下さった。読みながら感謝の気持で一杯になる。今迄この様に親切に出来たかと反省する。今更おそいかと思い少し悲しい。

まだ何日か続く文筥の整理が外出の出来ぬ今の私に楽しい日をおくらせてくれそうだ。急げよ後がない。

〝胸中を行き交ふ思ひ梅香る〟

煌星

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　正木萬蝶

◇畠島（一月号）　大橋廸代

冬の波浴びねば着けぬ無人島
板書冴ゆ半世紀経し絵地図とや

「なんと物好きな…」「でも楽しそう」「畠島って何処？」と先ず思いました。鑑賞の依頼が無ければ多分見過ごしていたことでしょう。

畠島実験地は田辺湾に位置し、自然保護を目的として国により買取りがなされ、全国の海洋研究者の拠点となっている。生物採集は最低限にとどめられ、無断上陸は犯罪行為。

冬の波を受け、冬蜘蛛の巣を払いながら分室に入り、五十年以上前の板書の絵地図にまみえた。京都大学の非常勤講師であった山本虎夫氏の残した絵地図は多くの研究者に多大な影響を与えた。近年の環境汚染や海洋汚染で生態系が狂い、人類や地球の未来が危惧される昨今ですが少しでも良い状態で未来へ繋げる努力が必要と作者は考えた事でしょう。

蔓荊や拾ひし貝の名教へあふ
転石をめくりて悲鳴イソ海鼠
ずぶ濡れのわれらに瞠る槽の河豚

驚いたのは海鼠や河豚の方では？ずぶ濡れの衣類も興奮と熱気で乾いてしまったのでしょうか？　さながらアドベンチャー、インディジョーンズのテーマ曲が聞こえます。

◇功の末（一月号）　星野和葉

引き合へり月下美人と今日の月
点滅の機影低空星月夜

本来ならば夏に咲く月下美人と深まる秋の満月を一度に目にしたこの光景は偶然か必然か？　その間にいる作者が天と地を結びつけ引き付け合っているのだろう。上五の「引き合へり」の力強さに作者の思いが感じられる。

星月夜の機影とは異国への旅立ちであろうか。まるで機影が星を引っ張って未知の国へと連れ立つようです。

有明の月に見参甲斐ありて
これ程の闇は無からむ朝月夜
シリウスや外にも出でよと誘はれ

ペテルギウス・シリウス・プロキオンを結ぶ冬の大三角。シリウスは太陽を除いて最も明るい恒星である。そのシリウスに誘われたならば外に出ない訳にはいかないでしょう。見上げる、眺めるではなく見参！　作者の月に対する心持ちが読み取れる。亡きひとを想う時、必ず夜空を見上げ話しかける。心が落ち着く。枕草子の「冬は夙めて」。夜が明ける少し手前の空の色。闇でありながら闇で無いような不思議な色である。自然に対する日本人の美意識は寒さをも寄せ付けないのだろう。暖かくして夜空を眺めて下さいな。

◇凝鮒（二月号）　茂木和子

拭き込みし大黒柱冬座敷

住宅展示場で見掛ける現代風の家は空間が広く柱が少なく大黒柱の存在が分かりにくい。畳の部屋が減り、正座する事も少なくなっている。拭き込んだ大黒柱と冬座敷がどっしりとした旧家を思わせ、そこに住む人々の佇まいや息遣いに奥床しさと威厳を感じさせる。古き良き時代の…。

にぎにぎと母と語りぬ凝鮒
度忘れの言葉もどかし石蕗の花

賑やかで家の中心にいるお母様と久々に会った時の思い出だろうか。取り留めの無い会話を懐かしむ。今夜煮込んだ鮒の煮付が固まり始まる夜。あの頃の母の年に近づいた感慨と凝鮒との取合せが巧みである。

森山良子さんの歌「あーあ、あの日のあの時の名前が出てこない…」皆さん、経験がおありですよね。花の鮮やかな黄色。とんでもない時にふっと思い出すが手遅れだ。

戸籍簿の大字小字冬座敷
不意に出た結婚話冬座敷

その場にいた者達には唐突だったのだろうが、この機会を窺っていたのだろう。婚姻届には本籍地の記入が必要だ。大字小字は江戸時代まで遡る地籍表示である。おめでたい席で字の謂れなど、話が弾んだことであろう。

◇ジャムづくし（二月号）　永野史代

短日の夫が厨に灯を点す
指のつめたき人はやさしい冬夕焼

趣味の域を超えたジャム、パン、料理の数々。エプロン姿も板に付き、妻の笑顔に励まされ、男子大いに厨房に入るべし！　ワインと共に会話もさぞかし弾む事でしょう。

作者のお体を気遣い付き添う通院の日々。ひょっとしてご主人と手を繋いだ時の指先から伝わる心の温もりでしょうか。寄り添う影を冬夕焼が温かく包み込むようです。

たましひいくつ失へりガザの冬
日向ぼこ天国へ攫はれし父と母

国家・民族・宗教など複雑な問題を孕み絶えず紛争状態のイスラエル国内である。ヨルダン川西岸とガザ地区に分かれるパレスチナ自治区。ヨルダン川西岸地区にはユダヤ教・イスラム教・キリスト教の聖地のあるエルサレムが近接している。目に耳にしない日は無いガザの名。ウクライナも然り。

報道される光景に慣れてはいけない。我が国の周りを見てみれば隣の大国や半島からの飛翔体に緊張感がはしる事もある。日向ぼこをしながらの父母を想う穏やかな日々が続いて欲しい。毎年必ず十二月八日の句を詠まれる作者。平和に対する気持が一際強い。地震、水害など戦争以外にも様々な災害が降り掛かる。強い気持と優しい気持を忘れないように何でもないありふれた日々に感謝したい。

ゆずり葉

◆季音二月

檜　鼻　ことは

煮凝に蘊蓄多き客集ふ　　大村節代

子どものころ、鯛やヒラメの煮付けだったと思うのだが、冷えた煮汁が固まった煮凝りを食べた記憶がある。多分、自然に出来上がった煮凝りだったように思う。ずいぶん昔のことで、いつのころからか家の食卓で煮凝りを食べる機会はとんとなくなってしまった。

掲句の煮凝りは、客人を招いた食事会で出された一品なのであろう。煮魚と共に盛られた煮凝りなのか、煮魚とは別に煮汁だけを取り分け調理された料理なのか、いずれにしても魚の旨みを含んだ煮凝りは、日本酒によく合い、美味しいことこの上ない。

食事会で、美味しい料理が出ると蘊蓄を傾ける人、それを聞きながらにこにこと料理を食べる人、人それぞれで、料理が美味しければ美味しいほど楽しい食事会となっていく。どうやら今宵は蘊蓄を傾ける人が多かったご様子。過ぎた蘊蓄はもういいのにと思うときもあるが、わきまえた蘊蓄には味があって勉強にもなるし会話も食事も楽しくなる。美味しい煮凝りだったのだろうなと推察した一句。

水鳥や近江の海に暮の鐘　　五明　昇

冬の琵琶湖を描いた美しい絵画を見るような一句。

四季折々、いつ訪れても美しい琵琶湖の景色だけれど、比良山系の雪化粧、湖面に羽ばたく水鳥など、琵琶湖の冬景色は格別である。「比良の暮雪」は近江八景の一つ。

作者が、水面に羽ばたく水鳥を愛でる夕暮、梵鐘の音がどこからともなく聞こえてくる。近江八景「三井の晩鐘」の鐘の音であろう。

三井の晩鐘は、その音の美しさから「姿の平等院」「銘の神護寺」「声の三井寺」と言われ、「残したい日本の音風景百選」に選ばれている。「場所を変え、季節を変え、何度でも聞きたくなる鐘の音である」と言う文章をどこかで読んだ記憶があるが、三井の晩鐘は、これまでも、そしてこれからも近江の地に、美しい音を響かせていくのであろう。

句を拝読し、静かなる湖面とたおやかな水鳥の姿、美しい鐘の音に浸ることができたことに感謝。

柏手の揃ふ夫婦や初山河　　渡辺舎人

神社に詣でたとき、美しく姿勢の揃った参拝の姿を見るとこちらまでもが清々しく凛とした気持ちになるものだ。

掲句はご夫婦そろっての初詣。下五の初山河の季語が語る瑞祥に満ちた美しい元旦の景色の中、意識するまでもなく揃うご夫婦の柏手に、長年連れ添われてこられた仲睦まじいご夫婦の姿が伝わってくるようだ。

赤き糸たぐれば夫よ神の旅　　福田千春

誠に幸せなご主人、ご夫婦だなと拝察した一句。

出雲大社に祀られる「大国主大神」は、「縁結びの神様」。陰暦十月、諸国の神々は、男女の縁を結び給うために出雲大社へ集うと言うことだが、「大国主大神」は、男女の縁だけでなく、人間関係や、人々を取り巻くあらゆるつながりの「ご縁」を結んでくださるのだそうだ。

長年連れ添われたご夫婦、楽しく幸せなことばかりではなかったかもしれないが、周囲の人たちとのご縁を大切にしながらこれまでの日々を歩んでこられたのであろう。これまでの人生を振り返って、よき人生だったと互いに思えるご夫婦のお姿に、読んで心があたたかくなった一句である。

短日や見るとはなしに小津映画　　石川理恵

短日の夕暮れ、見るとはなしに見た小津映画。昨年は、小津安二郎生誕百二十周年、没後六十年の年であったので、衛星放送を中心に小津安二郎の映画がいくつか放映されていたのを思い出す。

「見るとはなしに」の措辞から、たまたまつけたチャンネルに小津の作品が放映されていたのか。それとも家人の誰かが見ていた小津映画が目に入ったのか、それはともかく下五の「小津映画」が、この句を味わい深いものにしている。

小津安二郎監督の作品は、父と娘あるいは母と娘などをモチーフに、平凡な家庭の日常を淡々と描く作品が多いけれど、「ぬくもりだの暖かさだのそんなのはゴマカシですよ　僕は人生の本当の姿を描きたいんです」という小津安二郎の言葉の通り、いい歳になって、小津安二郎の映画を見ると、親子の心の機微に思い当たるところが多く、切なくなってしまう。

小津映画の代名詞とも言えるローポジションによる撮影は、畳に座る日本人の生活様式を美しく捉え、登場人物の所作や、言葉もまた美しい。

小津映画は短日の夕暮れの景色にふさわしく、見るとはなしに見た映画ではあったが、次第に魅入ってしまわれたのではないだろうか。

季音雪

横浜人形の家界隈　網野月を

表札にアルファベットや春隣
煉瓦塀に春遠からじ港町
ジグゾーの冬木の小枝青画(かぎ)る
寒の日や猛き光線振り降ろす
鉄仮面ほどの硬さや冬芽立つ

日溜り　石井喜恵

書き置きはたつた一行寒雀
手相見に小さき日溜り初天神
小流れの音なき音や探梅行
探梅や浮標きらめく湾一望
指切りの指ポケットに春を待つ

射程距離　石山かつ子

節分のたいまつ駈くる不動尊
玉串をささぐる葬春寒し
耕しの光鋤き込みすきこみて
矢狭間より射程の距離や春の鴨
半衿は白と決めをり早桜

冴返る　大橋廸代

墨の香の大仏殿や冴返る
決心のゆらぐ余寒の柱抜け
春の鹿一期一会を甘え鳴く
落し角孤高を持する反芻ぞ
焼山と五重塔に乾杯す

寒の明け　大村節代

ポシェットに飴玉三つ探梅行
春衣着て手も鼻も無き木の仏
寒の明け西暦で書く遺言書
寒明けるシフォンケーキのふつくらと
店頭に並ぶ球根寒明ける

いぬふぐり　小倉倭子

紅梅のひとひらを摘むあどけなさ
白梅や緊張の面を校門前
黄梅の香を嗅ぐ背伸び寸足らず
大好きな地上の星屑いぬふぐり
紅龍山春の七草裾模様

梅古木　栢尾さく子

東雲の異常いぶかる雪催
生前の秋子の逸話梅真白
新しく罠増やしたる山の春
くさめしてこだはりを吐く冬帽子
梅古木古木の色の鳥を呼び

末黒野　菊池ひろこ

末黒野に透明な酒持ち込めり
求職者二月礼者の替上着
三叉路を往き来の家鴨春近し
浜千鳥鎌倉幕府の治水策
浜千鳥砂地に入る車椅子

春信　五明昇

薄氷を割りて馳走の一夜漬
浅春や片戸の軋む農具小屋
閻魔堂に並ぶやつとこ冴返る
春光を簀桁（すげた）に揺らす和紙処
蕗味噌や峠の茶屋の焼むすび

真つ赤な嘘　境延昭

狐火や書斎の奥に幻灯機
玉砕の遺影は若し霜の花
寒紅や真つ赤な嘘を然りげ無く
春近し紙飛行機の宙返り
半玉は京では舞妓月おぼろ

白梅紅梅　椎野美代子

今生の今日の今なる梅一輪
抱へてもこぼるる香気野梅かな
爪十指灰かな火照り梅のころ
三三の五五とあはあは盆梅や
白梅紅梅木佛金佛なまめかし

昭和の名残り　島津初花

炉語りや祖父は一字を灰に書く
炉に寄りて祖母と掛け合ふ数へ歌
囲炉裏端針持つ母の手際よし
寒餅の乾反りを吊す天井裏
貼紙のいよよ老舗に鶯餅

寒明　鈴木康世

寒明けの余白へ飛ばす紙の鶴
何やらの胸のときめき寒の明け
寒明けや貝殻骨の動き出す
父遠忌ひとりで修す寒の明け
寒明けの世に災害の収まらず

春浅し　田寺玲子

寥寥とホルン流るる寒の牧
朝東風や淡路通ひのしるき水脈
突堤に寄する白波春浅し
下萌ゆる車輌行き交ふ操車場
払暁の追儺の鬼のみそぐ海

花咲爺　十倉和子

花咲爺の声なき声す冬桜
春隣落ちて鍋蓋はしやぎ過ぎ
採血の巧みなナース春立つ日
少しづつ赤子の喃語水温む
下萌やエンジンかかる農機具展

城子の碑　鳥羽和風

残雪や何時かは消ゆる蟠り
白梅の枝に神籤の花結び
花木筆なぞれば白し城子の碑
青空に蝌蚪游がせて水田かな
石山の寺に遊びて蜆汁

初天神　永野史代

初売りのはち切れさうな百貨店
汁粉食ぶ膝を崩すも女正月
絵馬すでに出揃つてゐる初天神
そぞろ歩きは湯島のあたり初天神
「春よ恋」の小麦粉使ひ春を待つ

早春　波多野寿子

人多き古刹に楚々と臘梅が
塗り椀を木箱から出す春立つ日
早春や髪カットして外に出づる
浅春を運ぶ風来て玻璃叩く
季節はづれの暑さを言ふや二月尽

白椿　星野和葉

風鐸の揺るるともなく梅日和
朝日燦つんつん尖る雑木の芽
ざわざわと鴉飛び交ふ雑木の芽
今朝落ちたる椿備前に甦る
マエストロ逝く大輪の白椿

光る　茂木和子

少年の深目差しや春の海
つと空へ飛び立つ魚春の海
沖波は螺鈿の色に春の海
裸婦像のまとふは春の光なり
春光の真つ只中へ駒放つ

大本山中山寺　森本早苗

梅日和観音様に会ひに行く
梅が香やお宮参りのややに逢ふ
お礼参りのよちよち歩く涅槃西風
涅槃会や心経唱ふる大願塔
梅八分参道に買ふ「こぼれ梅」

春　矢作水尾

玉垣の内なる静寂梅開く
春一番湯島天神女坂
半島は春一色に海青し
寒日和桴高々と太鼓打つ
鳶の輪の景のうちなる探梅行

春の月

山中 みどり

指長き遺影の男に霞草
寡婦となりたる友と浅春のロゼワイン
逝く人と残さるる人春寒し
寝静まる川添ひの町春の月
大川は黙し流るる春の月

梅匂ふ

柚木 治子

蒼き息吐きて白梅ほころびぬ
神神し白一輪の梅古木
直衣姿の襟足匂ふ梅まつり
白梅に遊ぶ小鳥の影絵めく
星屑を撒きて地に帰す雨後の梅

呱呱の声

由良 ゆら女

初午やお山に赤い風が吹く
ほろ酔うて狐拳など午祭
下萌や一山に満つ呱呱の声
魚は氷にぴよんと寝起きのよき童
はじまりは量子のゆらぎ竜天に

☆　☆

季音月

越前美人　町野広子

探梅や雑木の奥に尼僧庵
歩調乱るる探梅のご一行
色白の越前美人雪中花
水仙や沖を小樽へ向かふ船
寒卵コツンと幸の黄身二つ

うららか　大場順子

寒明や飛び立ちさうな籠の鳥
凭れれば大樹のぬくみ寒の明
立春のひかりの中の真帆片帆
真知子巻して人を待つ春の雪
うららかやお色直しの二度三度

木の芽風　梅澤佐江

縄文の火の匂ひかし焼野原
神殿を毀すごと踏む霜柱
勾玉のやうに胎児よ水の春
子へ開く双手は翼青き踏む
姫路城千の狭間より木の芽風

寒紅　高島寛治

決め球は直球が良し風光る
止むまでの間合ひ宜しき春の雪
寒紅をひきて堂々言ひ返す
枯木庭声筒抜けの隣家かな
立ち入れば幾何学模様枯木山

初午　松井由紀子

沼暮れて梢あかるき枯木道
秘薬めく寒紅母の手筥より
斑雪笑ふ羅漢の破れ衣
倒影の並木溺るる春一番
初午や供物に飴も路地稲荷

春の雨　池田雅夫

地に染むるこころに沁むる春の雨
春の野の風に彩あり香り来ぬ
濁るほどに余る勢ひ春の川
つばくろの一閃天地返しかな
春雪をすつぽり被り石燈籠

大地の息吹　丸山マスミ

寒紅拭き心の鎧解き放つ
霜焼の耳は福耳地獄耳
冬暖かついい長くなる立話
寒明くる島へ五分の連絡船
ものの芽や大地の息吹風の声

書架　正木萬蝶

水仙を活けて今より修道女
春近しざわつく「ファーブル昆虫記」
日溜りに溺るる猫や春隣
ほどけゆく毛細血管寒の明
寒明けの庭に鳳凰めきし影

猫柳　松宮保人

切り花を捉らふる薄氷ポリバケツ
ぴしぴしと薄氷遊ぶ登校児
頬撫でて赤児微笑む猫柳
猫柳映す河口の緩やかに
鶯餅枯山水に茶を啜る

春の星　森川義子

節分会守りつづくる旧家かな
天守にも瀬戸の潮の香冴返る
玉章の友の遺稿や春の星
寒晴や一本杉は天を衝く
門の緩む裏木戸春一番

歓喜　渡辺舎人

シャボン玉セット洗面所に睡る
野鯉らの皆鰭に春の光ゲきらら
白梅の歓喜や天を突き抜ける
一本の余寒小脇に太郎冠者
セーターの魂脱ぎしまま掛けてあり

春を踏む　井上燈女

雪中梅傘さしかけて女らは
子抱きても石佛平ら雪晴るる
民芸のグラス丸まる水仙さす
春浅し十歩歩きし児を胸に
杖を突く確かな一歩春を踏む

下萌　荒井倶子

駄駄つ児が所作をきりりと寒稽古
薄氷に鯉の目ん玉浮き上がる
下萌やゲートボールの声朗ら
下萌や小さき社に大願を
解体の重機のひびき冴返る

春の月　上戸千津子

尺八の音色も板に春の宵
弾む声揚がる絵凧は昇り龍
早立ちに道連れとなり春の月
黙々と丹精こめて春菜畑
初午や祠に二人紋羽織

春光　内田恵子

戦なほ轟轟迫る雪解川
鬼とても地球の仲間節分草
春光の巨船現はる水平線
ミステリーのどんでん返し春の海
花菜漬婆は魔法の手を持てり

天守閣　近藤徹平

能登半島復興祈願居開帳
寒明や秩父札所に前座歌手
玉将が雪隠詰めに春の雷
天守閣四囲は峨峨たる山雪解
朧月ダムの宿直は四畳半

明日への命　井上玲子

明日への命を孕む焼野原
昼の月淡くかかりて焼野原
せせらぎの水照りをさそふ猫柳
浜千鳥波と戯る由比ヶ浜
立春の路地にぎやかに手毬唄

春ショール　山田美佐尾

焼野の火一揆ののろしのごとなびく
焼野原一望千里見渡せり
駅を出で銀座の通り猫柳
猫柳神社裏より旅行バス
春ショール肩よりずらし娘行く

サムライ町　松本光子

尼寺の屋根高からず春の海
「サムライ町」の木の芽田楽串長し
牛小屋と母屋を仕切る木守柿
花菜風坂行く少女の黄のりぼん
通学路の花袋生家や春めきぬ

苦笑ひ　野口和子

春の雪転びたる夫苦笑ひ
親子大工響く金づち日脚伸ぶ
女子会は親子三代桜餅
ものの芽や天気予報は雨続き
雪解川波音立つる程もなく

花帰り　大塚茂子

紅梅や若き二人の花帰り
小豆島醤色塀花ミモザ
木洩れ日やミモザ萌黄を零しをり
雪割草大地の呼吸吐くごとし
初午や母に馴染みの鯨尺

探梅　川崎道子

甕棺にままごと道具冴返る
アンテナの鴉動かぬ建国日
草野球春泥まみれの滑りこみ
行き違ふ人の残り香探梅行
探梅や髪に香りを持ち帰る

浜千鳥　熊倉千重子

春立ちて杜に呼応の鳥たちよ
一輪車覚え御機嫌春立てり
梅まつりしばし大和の香に浸る
波の綺羅声を残して浜千鳥
強東風や声の届かぬ測量士

早春　福田千春

春近したうたう出来た逆上り
匂ひ立つ土の湿りや春近し
早春のミニより伸ぶる脚白し
早春の光を纏ひよちよち児
濁り目は憂さを見ぬため朧かな

雪解道　松山清子

スニーカーおつかなびつくり雪解道
おどおどとタイヤの跡を雪解道
棒のごと五臓六腑に寒の水
薄氷を割つて朝日を煌めかす
夫の忌に慣れて余寒のイタリアン

☆

☆

特集 名園を歩く
特集 結社誌を読む
巻頭作品10句
緒方　敬・雨宮きぬよ・谷中隆子
若井新一・鳥居真里子・奥坂まや
山本一歩・津川絵理子

俳壇
5月号
4月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
河原地英武
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅳ期］…鈴木しげを・名村早智子
連載
旧派の俳句……秋尾　敏
知ってるようで知らない俳句用語…井上泰至
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……辻村麻乃
十二か月添削教室……前北かおる
俳書の森を歩む……栗林　浩
俳句と随想12か月　石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

季音花

再会　野田静香

再会の笑顔の能登や春きざす
寒明や風の操る鐘の音
春きざす爪にも花を美爪術（びそうじゅつ）
春一番壱岐の漁師を弔ふか
春の鳥パテシエの夢実現す

吉の文字　檜鼻ことは

安寧を祈る二日となりにけり
青空や仕事始の喫煙所
大寒や仏間に灯りつける朝
寒紅やあと一合を頼む店
蝋梅や水占ひに吉の文字

春はふんはり　河野はるみ

春は曙だみ声で鳴く裏の鶏
大空へ手を広ぐる樹寒明くる
朝日受けきらきらふはり猫柳
ネイルアートの銀粉きらり猫柳
看板媼ときをりこくり春日向

立春大吉　日高道を

立春大吉鳥も獣も色めきて
京菜茹で東京のこと京のこと
冬ぬくし隣の家に稚の声
一心不乱波打際の浜千鳥
山笑ふ金子兜太のプラカード

命の春　青木鶴城

春光や亀の甲羅と太鼓橋
春禽の蹲踞で見合ふ手水鉢
春日や牧の牝馬の競ひ駆け
公魚や無我ならざれば功徳なし
百獣の恋の目覚めや牡丹百合

春一番　石川理恵

リハビリに明け暮れる日々冬すみれ
寒明の小抽斗より古き鍵
立春や飛び越えてゆくにはたづみ
道たづぬ春一番に吹かれつつ
かんばせの佳き古雛を飾りけり

膝折れば　曲淵徹雄

大落暉赤き水尾ひく大白鳥
ぬる燗や囲炉裏で語る八代亜紀
暮六つの川を急く塵春寒し
福相の五百羅漢や春の雪
膝折れば息吹く一叢いぬふぐり

鄙暮らし　保坂翔太

寒鰤や出世頭も鄙暮らし
恐竜の骨の真贋山眠る
寒椿女剣士が面一本
家系図の始祖は天保着衣始
姦しきとげぬき地蔵冬うらら

水門　横山君夫

野に色の動き初めたり犬ふぐり
水門へ土手は直線草青む
遠来の友待つ宵に春の雪
母見舞ひ嘘残し来て春寒し
一回り若く見られて春の服

花一匁　染谷風子

たつぷりと鹿沼土盛る雨水かな
けふ雨水京より届く経机
春雪や場末のバーに「文學界」
追憶の花一匁いぬふぐり
じやんけんで決むる席順春の鳥

寒明ける　渋谷きいち

手を添ふる汁粉の椀や寒の明
不言実行明日バレンタインの日
実力に勝る気力や復活祭
背で受くる赤城の颪公魚釣
用意周到旧正月の婆抜き

春の土　原田秀子

春の土天地返しの鍬の先
岩間より大地の息吹き雪割草
発掘の鋤簾で掬ふ春の土
くろぐろと犬の鼻先春の土
銀色の葉かげミモザの小房ゆれ

春は名のみの　石田慶子

ハミングの君の明るさ受験終へ
春近しウッドデッキの白ペンキ
春近し市民農園抽選会
早春の母待つ杖に根付け下げ
春一番マスクに下がる付け睫毛

薄氷　飛永鼓

戦ひを終へたる畑の薄氷
採り終ふる土の窪みや薄氷
薄氷を踏みて安堵の笑み溢る
春浅し農事暦を繰りて見る
スキップの記憶遥かや春の川

夫の杖　笹本啓子

余寒なほ玄関にある夫の杖
冴返る胃の腑を探る内視鏡
草萌ゆるよちよち歩く赤い靴
田楽や味噌が自慢の峠茶屋
校庭に小さき土俵や鳥帰る

伊根の舟屋　野村美子

奉納の玉垣に雪嵐山
朝食を伊根の舟屋で春晴雨
早春の八丈島へ定期船
千本鳥居潜り廻れば春晴雨
浅草の今朝の路地裏凍返る

下萌ゆる　髙橋満耶子

下萌や古きピアノの調律音
松明の火の海流る冬の山
流氷に囲まれ喘ぐシャチの群れ
腰紐の縫ひ目なよなよ針納め
春雪に悪戦苦闘都市交通

海のかけら　松島寛久

停年の男ら岩に海苔を掻く
正面に沖の石置き海苔の舟
海苔舟や夫婦の話し海が聞く
春浅し海のかけらの貝拾ふ
薬石の粥あつあつと寒椿

始発電車　宮﨑チアキ

節分や始発電車の滑り出す
待望の休息得たり臥竜梅
麦踏の足取り軽し巻脚半
寄り添うて千鳥の浜辺夕あかね
足元に一枚掛くる霜夜かな

恍惚のブルース　瀬戸雄二郎

どこからか恍惚のブルース朧の夜
交番の手配写真の朧にて
色街へ急ぐ僧侶の朧かな
朧夜や昔の恋は焦れつたし
朧かな太宰渡りし跨線橋

冬の朝　田中章嘉

寒暁や牛舎の息の競ふ如
霜柱花壇の土の牙光る
霜柱踏む子は将の悦にいる
小鳥来て啄む物もなくて去り
冬の朝厨は湯気の墓場かな

早春　鈴木玲子

群れ咲くも意志それぞれに水仙花
潮の香とともに水仙抱ふる女
早春の発車メロディー円舞曲
早春やおかつぱの児の振りむきぬ
厨の一枝より白梅のほつほつと

春の雪　下川光子

寒紅をさして童女の真顔なり
枯木よりひよいと風の子かすめたり
灯を捧げ鎮魂の礼春を待つ
川底に光る物見ゆ春日影
新宿南改札口の春の雪

冴返る　野平美紗子

早暁や鳥の声まで冴返る
冴返る月なき空に星数多
春時雨庭の植木が生き返る
春時雨定刻を過ぎバス来る
玄関にバレンタインの贈り物

枝垂柳　葛城千世子

草萌ゆるコンクリートの隙間にも
短文の欠席ライン花冷ゆる
家元より「道」の色紙や春や立つ
瓶並べ赤白黄のはないちげ
大作席の枝垂柳やゆったりと

☆　☆

座談会
最近の名句集を探る
能美茅柴『悠紬』
染谷秀雄『息災』
本井英『守る』
司会＝筑紫磐井　大西朋　小野裕三　甲斐由起子

◉人と作品
浅川芳直 句集『夜景の奥』
総論……対馬康子
一句鑑賞……小川軽舟　坂口昌弘　高野ムツオ

◉武蔵野大学国文学会 特別対談
「一回性の醍醐味」
井上弘美×桃沢健輔

◉巻頭三句
星野椿　増成栗人　大高霧海　浅井陽子　小川晴子　水内慶太

◉今月の章
後藤章　島貫恵

◉俳句と短歌の10作競詠
西生ゆかり　睦月都

◉好評連載
成瀬政博 とりあえずの日々
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西朋 俳句へのまなざし
井上泰至 俳句の詩語イメージ辞典
神作研一 てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
堀田季何 諸家書架
二ノ宮一雄 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2024年5月号
4月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明二月号）

石口　栄（「鷗座」・編集長）

竜が噴く寒九の水や柄杓の香　鳥羽和風

竜吐水は本来、消火用具の一つで、水を入れた大きな箱の上に押し上げポンプを備えたもので、横木を上下させて水を噴き出させる。オランダからもたらされ、名は竜が水を吐くのに見立てたことによる。

しかし、ここでは座五に柄杓とあることから消火用具ではなく手水舎にある、手や口を清めるための竜吐水のことであろう。

多くの手水舎は、四方転びの柱が用いられ、四方吹き放しとなっており、その中に水盤が据え付けられ、柄杓が置かれている。柄杓に掬った一杯分の手水を使い、一連の所作を行って聖域へ。

水盤に水を送る役目として竜頭などが置かれ、その口から水が滾々と、流れ出ている。この竜のことを「吐水竜」という。竜（青竜）のほかにも、亀（玄武）、虎（白虎）、鳳凰（朱雀）といった「四神」や、鹿、牛、蛙などの神獣の場合もある。竜は、水を司る神様と考えられ、その水は神様の水である。その水を「寒九の水」と特定したところに健康長寿を願う作者の気持ちが表白されている。大いなる御利益が期待される。柄杓は主に檜で作られるが、その香りに安らぐ作者は敏感な嗅覚の持ち主に違いない。

山伏のほら貝ひびき山眠る　髙橋満耶子

山伏は修験道を信仰し、霊山に籠って厳しい修行を行う者である。

その修行によって超自然的な力や霊力を身につけ、人々に祈祷や呪術などを行う役割を持つ。また生きたまま仏になる道を目指し、六根を清浄にすることを説く者もいる。それらは奈良県吉野山地の大峯山を代表に鳥取県の大山、山形県の羽黒山など日本各地の霊山を踏破し懺悔などの厳しい艱難苦行を行っている。作者はこの何れかで山伏の吹く法螺貝の音を聞いたものと思われる。山伏は食べ物も水も断ちほぼ不眠という状態で、身体を過酷な状況に追い込む。

ここでは季語「山眠る」と山伏の言葉の奥に隠れた「不眠」の対比に注目したい。無彩色、深い静寂な冬山に響き渡る法螺貝の「ぶおぼ～ぶおぶおぼ～」の音が作者の腹に響いたであろう。また名句、秀句と言われる所以には、一句の中より音が聞えて来ると言われている。例えば松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」や「長閑さや岩にしみ入る蟬の声」などのように一読して「水が跳ねる音」や「蟬の鳴き声」が聞えて来る。掲句も平明ながら法螺貝の響きが聞えてくる秀句と言える。

現代俳句鑑賞

網野月を

稲架襖重さの見えぬまで乾く　西山　睦

（『俳句界』2月号・定まるまでより）

天日干しの為の稲架は昭和中期頃までの日本の原風景の一つであろう。筆者の実家の周辺では昭和四十五年頃まで見かけた風景である。中七座五の措辞は稲架に架けた稲束の色合いの変わりようを表現している。本来「重さ」は見えないが、そこは農人たちの知恵と経験が集約されているのだ。他に「あぢさゐの色の定まるまでを雨」がある。

マフラーに顎埋め黙秘権　行方克己

（『俳句』2月号・近松忌より）

中七の「顎埋め」の読みは定かではないが、上五中七の叙するところの景を座五の「黙秘権」に収斂した技巧は極まっている。昨今の人々の姿を叙するとともに社会の裡を映しているように思えてならない。他に「虚にあそび実に迷ひて近松忌」「抜けがけの小才もあらず近松忌」がある。

めりめりと雪雲溢れたるダム湖　山崎祐子

（『俳句』2月号・ゆつこぎより）

「ダム湖」に雪雲が映し出されている。雪を降らせようとする雲ではなく、今まさに雪を降らせている雲であろう。「めりめりと…溢れたる」であるから、「ダム湖」を蔽うほどの雲塊である。空一面の雪雲である。上五のオノマトペを中七の「…溢れたる」の叙述が決定づけている。他に「ゆつこぎの紐をきりりと春を待つ」がある。

大寒の髭へへやかに伸ばしけり　久行保徳

（『俳句』2月号・冬の坂より）

「荏苒（じんぜん）」という形容動詞がある。まさに「へへやか」は「荏苒」と同義である。「荏苒」には春の季感があり、筆者は春の季語にもなり得る程と考えている。作者は句に「大寒」の季語を斡旋して、加えて座五に「…けり」の切れ字で句をおさめて「へへやか」をより高次の修飾語として止揚してしまっている。他に「恋敵と話している蜜柑狩」「藁色に暮れる産土冬の坂」がある。

熊穴を出でし途端の王手飛車　高橋将夫

（『俳句四季』2月号・巻頭句より）

将棋に穴熊という手法がある。かの将棋十五世名人大山康晴の得意手でもあった。香車を一枡進めた跡に王将が入り、金将、銀将で守りを固めるものである。その王将が燻り出された後に「王手飛車」取りの手を敵に打たれた、ということである。つまり同時に王手にも飛車取りにもなっていると言うことで、絶体絶命の窮地に立たされたという意味にとれるだろう。将に機知の横溢した句である。他に「己が道作り流るる雪解水」がある。

そそと明く旧家の庭の木の根かな　山本鬼之介

（『俳句四季』2月号・季語を詠むより）

「木の根明く」の季語で詠む企画のページに掲載されている一句である。「木の根明く」は季語「根開き」と同義として宮坂静生氏の提唱した「地貌季語」に類するものである。地貌季語とは、「風土の上に展開される季節の推移やそれに基づく生活や文化まで包括することば」として位置づけられていて、「季節に関する『地貌季語』とした」と氏は述べている。雪国では「根開き」なのであろうが、「年明け」「寒明け」同様に、多分に人の感性が加味されて「開く」ではなく「木の根明く」なのである。「明く」としたことで、春を迎えた頃の新たな息吹と呼応した人の感慨を表現していると言っていいだろう。

句は、旧家の庭先の佳樹の景である。佳樹の根元の周りから雪が消えて大きくドーナツ状になった景を詠んでいる。上五に「そそと明く」とし座五に「木の根かな」と配した。五音からなる季語を分割して、且つ動詞に副詞を付属させ名詞は切れ字「かな」を伴って十七音に収めた手法は、圧巻である。

まだ水の色のままなる初氷　河内静魚

（『俳句四季』2月号・毬より）

座五の季語の「初氷」は、その冬のシーズンにはじめて張る氷のことである。上五中七の措辞の率直な言い回しが「初氷」の文字通り冬の訪れを感じさせてくれると同時に「初氷」の様態を的確に表現している。

龍天に登る構への息遣ひ　山﨑十生

（『俳句四季』2月号・星辰より）

「龍天に登る」はいたって気象（学）的な語なのではあるまいか。春先には冬の大気と春の大気が鬩ぎ合っていて、電（いなびかり）や雷（いかづち）の季節でもある。それらの気象の詩的表現の延長線上に「龍天に登る」があるのであろう。十二支の内、唯一架空の存在である龍を想定しながら「息遣ひ」というのは、作者の諧謔である以上にファンタジーなのである。俳句世界の展がりを意図している作句であろう。他に同季語の句として「刺青の見事な龍が天登る」「龍天に登る戒名などあらず」がある。

三月号の巻頭句

季音雪　鶴髪の溺るるばかり初日影　由良ゆら女

季音月　初春や鳩は胸から歩き出す　高島寛治

季音花　石一つ投げて家路へ冬の川　檜鼻ことは

水明集　月山の上に弓なる冬銀河　西幅公子

鼓笛集　雑煮餅数問ふ声の高らかや　菅原真理

山紫集　山眠る城に光の彩なして　鈴木玲子

俳誌望見

染谷風子

「雪嶺」

二〇二四年一・二・三月号　通巻三九五号
主宰　石本雪鬼　発行所　北海道札幌市

昭和五四年六月、札幌水明句会、堤影句会の指導者で水明同人であった横道秀川を編集発行人として創刊。季刊。創刊号には当時の水明主宰星野紗一が賛助作品として「梨の花」と題し五句出句している。

巻頭の主宰詠「短日」八句には、「自句の背景」の題で自註が付されている。それより四句抽出。

短日の朝日地平を朱に染めて
秋日和惜しみつつ打つパーク場
時雨止み落葉拾いを隣まで
歴史から学べぬ師走戦未だ

一句目、自註によれば、「北国の冬の日の出は波長の長い赤い光が卓越し札幌でも朱色になるが、緯度が高い北極圏の街ではより多様さを増す」とある。科学的説明に読み手も納得。二句目、パークゴルフ場は秋から早早と半年間の休業に入る。北海道の自然のなせる業だ。三句目、「時雨」と「落葉」の季重なりの句だ。「時雨止みを待ちながら家の周りの落葉拾いに励んだ」と自註にある。札幌の時雨に魅せられる。四句目、作者は為政者に「非戦の歴史に学べ」と訴えている。

同人作品「銀河集」四名四十句より共鳴句四句。

細々と今年秋刀魚の焼く煙　山本圭子
お互ひに深くは問はじ式部の実　荒川弘子
秋風と光巻き込む草ロール　藤田保子
舞ふ鳥の点となるまで秋澄めり　木村忠子

一句目、最近、秋刀魚は不漁で型も小さい。焼く煙までも細々としている。三句目、上五中七の「秋風と光巻き込む」が秀逸だ。四句目、広大な北海道の秋空の描写が鮮明である。

同人作品「銀杏集」十二名八四句より共鳴句四句。

秋深し路上演奏シャンソンに　高野まり
伝蔵の句碑にたたずむ秋の浜　成田恵美子
鳴く虫の耳にささやく閨（ねや）の窓　宮下芙紗子
小窓あけ秋風誘うピアノソロ　近藤ゆたか

二句目、秩父事件の井上伝蔵が逃亡先の石狩で「柳蛙」の俳号（本句註釈）で俳句を嗜んでいた事は初めて知った。

主宰選「雪嶺集」より共鳴句五句。

我が花器や印度の女性に買われゆき　川人久美子
ねこの眼の深き琥珀や秋夕焼　嶋田喜四郎
向ひ合ふ黙の夫婦や夏喫茶　廣中ふみ江
夕立雲古書値引する蚤の市　片平妙子
掛軸の「一喝」胸に涼感じ　開　昌女

読了し、北海道の四季と風土を背景に身近を材とした秀句が多いと感じた。「雪嶺」の益益の発展を祈念致します。

山本鬼之介　選

水明集

寒林の踏み入る先の瀬音かな
ワイングラス並べ優雅な日向ぼこ
寒林に遠ざかり行く熊の鈴
初景色出雲の空に日章旗
早梅や熱海で逢うて共白髪

さいたま　新　暦文

可杯で享くる年酒の無礼講
開眼の達磨燻るどんどかな
一本のながき眉毛や老の春
寛解のそふる一文寒見舞
珈琲のかをる街角冬萌ゆる

伊　奈　菅原卓郎

真直なる初日を拝む幸せよ
たまさかの光と遊ぶ冬の蝶
冬の蝶二頭で飛んでゆきたまへ
糸を編む時ゆるやかに冬日差し
赤糸で仕上ぐる刺し子冬うらら

さいたま　菅原真理

氷上の湖心を目差し渡り初む
音のなき湖一面の厚氷
初夢や幼き頃の家の間取り
年の朝静かに起きて厨立つ
伊勢海老の姿に福を呼ぶ心地

岡田宣子

富士山を窓より拝す初景色
初景色ただ一筋の雲を追ふ
早梅の香りただよふ日暮かな
早梅や何はともあれ酒旨し
早梅を竹筒に差し香り増す

篠﨑紀子

初富士や明日は箱根へ勝ちに行く
白羽に気満ちて端正破魔矢かな
理髪店のいつものレジの福寿草
初晴や蔵に積まるる米俵
賽の目の五で上がりけり絵双六

小林京子

冴え冴えと明星孤高誇りをり
暮れゆくや冬川の面の水明り
年明くる八十路過ぐるも青春を
元旦の澄みわたる空とこしへに
冬晴の箱根道中華の富士

さいたま　山岸久美子

朝焼けに湖面煌めく初日の出
初晴や上棟式の餅拾ひ
正月の奇跡の脱出日航機
すずしろのそこはかとなき白さかな
やがて来る季節の遣ひ福寿草

元田亮一

琴の音や淑気満ちたる「春の海」
厳かに和歌の朗唱松の内
海青し斜面満目水仙花
床の間の脚光のごと福寿草
初晴の駅伝流るる八木節

反町　修

元日のほろ酔ひ醒ます震度七
子に話す我が人生や老の春
蝋梅や不器用に生くる矜持かな
風花や天界からの散華とや
韮雑炊中華店主の味自慢

清水桂子

生糸取る婆の手捌き千代の春
大鮪へ大間の熱気心意気
凍蝶やうすむらさきに透けゆけり
薄日さし凍蝶ねむる花のやう
着ぶくれて着飾るなんてなんのその

さいたま　西幅公子

電波時計の電池替へつつ去年今年
住所氏名を神に伝へて初詣
賑やかに新年会はイタリアン
軽やかにシャッター上がり初商
海と城ともにある町初景色

平塚　丸屋詠子

年の空蕎麦打ち悠悠自適かな
初景色勢ひ連ぬる信濃川
静謐や光芒挿頭す初浅間
参拝の人出にぞめく初鴉
亡者送り電気ブランは三杯目

さいたま　皆川更穂

初景色門を入らぬ象の尻
初髪も鎖で登るをとこ坂
重詰へひたと寄せくる黒い波
嫁はんの実家無傷と初便
久女の忌網のタイツでノラになる

森下山菜

水仙や初めて触れし白き指
水仙や丘の道辺に頭垂れ
正月や歌舞伎役者が見得を切る
トタン屋根音たて落つる氷柱かな
山小屋の氷柱地面に突き刺さる

さいたま　千坂平通

変形の指で裏漉し年用意
紅の特に濃き日や初茜
落款の曲る箱書き寒椿
しののめや破魔矢の鈴のかろき音
ストックと破魔矢挿したる赤リュック

池田珪子

海峡に糸電話引く冬の子ら
どことなく声に華やぎ初電話
彼の人の年賀の和菓子「宝相華」
人波に飲まれ浅草切山椒
水糸に父の想ひ出小正月

越谷　阿部幸代

富士の山真紅弥増す初景色
早梅や優雅な女歩みよる
早梅や稚のほつぺの紅濃やか
はぢらひてほどくるやうに梅早し
山門の竜玩ぶ初雀

さいたま　霜多光代

着ぶくれて駆くる階段始発ベル
歌留多取りひときは高き恋の札
昨日と違ふ今日生みたての寒卵
地吹雪や午後の授業はなくなりぬ
被災地のがれきの中の福寿草

さいたま　梅澤輝翠

小晦日越前蕎麦粉出番待つ
心音の奏づるリズム去年今年
御守りを差し出す巫女の悴む手
水鳥や川面に光遊ばせて
水鳥の光の中にまどろみぬ

熊谷　越田栄子

障子また開けて真白き富士眺む
煌めきて霜の縁取る畑のもの
初鳩のまた舞ひ戻る大庇
お年玉幼き順に夫の前
三が日我家膨らむ餅の如

さいたま　本橋稀香

数多なる煩悩抱へ去年今年
あざやかに梯子に登る出初式
サイレンの聞こえぬひと日冬日和
つかのまの幻世を生きて冬北斗
冬晴にソーラーパネルが生き返る

飯田忠男

祖父のなほ几帳面なる冬構
裏山にこぞりて初日待ちにけり
東の野に暁光の淑気かな
くれなゐといふ美しき寒椿
群生の水仙香る権現堂

さいたま　加藤でん治

さりげなく老いも紅ひく松の内
菩提寺の法要にゆく松の内
悪しき事いくつ重なる年始
世の乱れ憂ふばかりの去年今年
初日記能登震度七ありと記す

杉戸　佐々木史女

家仕舞の話などして冬木の芽
登校のしんがりの子の息白し
歌舞伎座や春着が列をなしてをり
春着の子家族写真の真ん中に
見慣れたる鳥羽富士なれど初景色

若狭　山﨑郁子

六地蔵六の面差し花の里
結願や宿坊ひとり春の星
老境の今を好期と徒遍路
花散るや風の流れに委ねをり
百薬に優る晩酌おぼろ月

さいたま　香田裕誌

日溜りに落葉のごとく冬の蝶
そよ風に吹かるるままに冬の蝶
吾子の子ら家中走る松の内
海の幸山の幸詰め女正月
病み明けに元気の素よ寒卵

さいたま　竹澤和子

柳葉魚焼く尾頭付きの空威張り
ひとり飯ぷちぷちぷちと柳葉魚食む
夕日浴び黄金に滲じむ枯野かな
雨音の冷たさ運ぶ夜明前
しみじみと来し方語る年の暮

寺町知子

初春や見沼太鼓に踊る龍
初富士とわが家が見えて一礼す
破魔矢持つ少女剣士の太き眉
凍鶴のいま渾身の一歩かな
初春の山河の鼓動聞こえけり

綿引まりこ

木立から煌めく朝日初景色
掛け声やし吹く渚の寒稽古
被災者の振る舞ふ気丈寒きびし
せせらぎの音心地良き春隣
春淡し窓の光を摑みとる

若狭　岡本祥子

初鳩や鳥居の先は青き海
禅僧の小欲知足初箒
小正月「ムスメキタカ」を急ぎ煮る
計らずも本気になりぬ投扇興
投扇降り立つ形に「明石」とは

さいたま　岡田芳春

厳かを地震切り裂く年新た
想ひ出は海馬に眠り初電話
初夢ののらりくらりと終はり見ず
予想より僅かに多しお年玉
新婚の姉は数の子煮て出しぬ

山戸美子

杖を手に観音堂の冬木道
雑踏の中に寒波のモアイ像
「白金」の八頭身の冬木かな
冬の日や英和辞典に拡大鏡
内戦や塀の外より寒波来る

川口　新井のり子

来賓の長き祝辞を絶つ嘘
すぐそこのポストが遠し寒波来る
冬木立ゴシックの体めくプラタナス
待ち合はす冬木となりぬ欅下
あるもので済ます夕飯寒波来る

木村小麦

松の内孫の願掛け鎮守さま
松の内地震連呼に悪夢また
くもの巣の端に凍蝶ぶら下がり
年始膳あれもこれもと迷ひ箸
すき焼に待ちに待つたる寒卵

さいたま　小川洋子

剪り落とす枝に膨らむ梅冬芽
産土より知らぬ夫なり春待てり
春霙柩に入るるパンひとつ
家事の手の暫し止まる初音かな
素つぴんの在所の空や鳥帰る

若狭　松村笑風

風爽か京の舞妓のだらり帯
柘榴裂く前歯抜けたる吾子笑ふ
半島の海を見下ろす冬木の芽
初笑ひ話のつきぬクラス会
水仙花香りが誘ふ無人店

畠中八重子

松の内昇る日輪神々し
幸せや初日を拝む九十九里
駅伝に糸雨降りそそぐ二日かな
子の所帯丸餅となる雑煮椀
無断駐車の人を探すや松の内

さいたま　森下美智枝

雪原や朱と鼠色が融くる空
金継ぎの九谷の鉢に冬薔薇
プラントの働く光冬の河
取り取りの辰の絵ありて初笑
外房線青海原や水仙花

さいたま　蛭田律子

年明けを寿ぐ調べウィーンから
泣きべそも終つて笑顔寒稽古
初写真一番ちびは吾となりぬ
折れさうな心支ふる野水仙
鉄骨の軋む廃屋大寒日

鈴木藻好

帯解けば体ふはりと成人の日
よそほひて乙女輝く成人の日
成人の日の街は明るき色あふれ
我を見てひと声鳴くや寒鴉
寒鴉ひと声鳴きて飛び立てり

高原和子

着ぶくれや生き物めきてバスの列
雨傘の倒る枯芝へと日差し
グミ嚙めば硬き力や寒の入
冬の月冷えても旨きカレーパン
雪ふはり口約束の食事の日

吉川拓真

伊勢海老や髭口ほどに物を言ふ
氷踏む音に目醒むる別れかな
今流と名を変へ闇鍋トマト浮く
松過ぎてひとり始末す残り物
三味線がさらふ組歌初稽古

吉川杉浦千祐

初鏡八十媼も口紅を
表紙はぐ音もめでたや初暦
火ぼこりの浮かぶお神酒やとんど焼き
めでたさ半分ありて幸せ初御空
ふる里のいよいよ遠し山眠る

枚方寺内洋子

円陣のサッカー少年冬木の芽
外つ国の冬至南瓜を四半分
百歳をふはり跳び越へ年迎ふ
目にまぶし春着の妻の割烹着
二日はや宅配ピザで済ます昼

さいたま　森美枝子

さまよひて親しくなりぬ春の風
薄氷を歩む小鳥と十五歳
酒星や益荒男の夢膨らみぬ
ふるさとは潮汐の色浅蜊汁
富士山の墨の五彩よ夕桜

所沢　関根千恵

初霜を踏みてバス待つ徹夜明け
木枯や袋小路に酒場の灯
小さき手に小さき熊手や手締め沸く
参道に飴切る音や小正月
高々と梯子を架けて出初かな

さいたま　大熊健司

生きたる様に死後も在らむか年新た
年新た久々に弾く夜想曲
恙なく金婚迎へ雑煮膳
新春光窓辺に絵の具箱開く
平穏の日々を願ひて三が日

宮代　関谷多美子

初鳩の霞んで見ゆるなゐの報
あどけなき娘の胸に春近し
一言を呑み込む勇気掘り炬燵
偲ぶ人鍋つつきつつ冬の月
足早の帰路に追ひ付く初の雪

さいたま　鈴木香音子

冬晴や琵琶湖疏水に水は無し
かんなぎの髪に鹿角初神楽
大吉の開運引いて初神籤
初参八方睨む龍天井
巫女の舞ふ鈴しやんしやんと初神楽

北山建治郎

初夢や富士の姿のくつきりと
初夢や飛行機の旅遠くなり
碧き夜や冬木静かに立つてをり
初富士や喜寿の夫との二人連れ
寒菊や半袖シャツの小学生

さいたま　小駒さち子

寒林を抜けて吾の背のしやんとして
寒林を足早に抜け深呼吸
優しさの広がる寒の甘露飴
三姉妹八十路過ぎての小正月
孫からの「少ないですが」お年玉

鳴海順子

茶室へと飛石伝ひ寒の梅
にじり口入れば一輪冬の梅
眠りへといざなふ曲や外は雪
ミッキーと娘と二人初写真
チェロを背に駅の階段冬帽子

湯浅　和

裸木や鋭き枝の天を差す
走らざる静脈血や冬深し
初夢の落ちあやふやに「朝ですよ」
焼芋の匂ひに釣られ遠まはり
追羽子や江戸の狩場の公園に

綿貫ひさの

悴みてファスナーにさへ嫌はるる
水鳥の仲睦まじく円を描く
ワイパーの滑り鈍くて悴めり
悴むや背中丸めて拝む癖
夕靄に紛れて深く浮寝鳥

去年今年おだやかならむ風の音
雑煮食ぶ変らぬ味と塗りの椀
賀状来ぬ友の面影ばかりなり
山茶花の紅垣に溢れをり
神頼み殿につく初詣

初明り薄闇空も色を変へ
雨戸開け一枚ごとの初明り
見上ぐれば金星の空初明り
竹馬や転び歩きて陽も暮れぬ
仏壇の若水替へて孫来たる

闇汁に上がる喚声「これ何だ」
日脚伸ぶ名水を手にころがして
農夫らの水路さうぢや春近し
森中の古木の新芽春近し
のんびりと和む読み手の歌留多かな

さいたま　緒方みき子

東京　柳父はる

さいたま　持谷寿夫

茨城　倉田星歩

新年の絵手紙金で縁どられ
姉妹猫屋根より落つる雪つかむ
新年や日々体重計にらめつこ
去年今年帰る人あり来る人あり
松の内悪魔(あくま)暴るる日本海

初富士に日のあたりたる渚かな
初夢のひたすら走つてゐるばかり
破魔弓や「隠れ銀杏」の子株生ふ
湧き水を拝み授かる破魔矢かな
極寒の揺れ鎮まらぬ市場かな

水鳥の争ひもなく飛び立てり
宍道湖の夕日に集ふ浮寝鳥
長旅を波に癒して浮寝鳥
悴むや参れぬ母へみくじ買ふ
悴むや互ひに見舞ふ立ち話

初春やとめはね並ぶ御朱印帳
門松と共に背すぢを伸ばしをり
大吉や冬の蝶来て袖に舞ふ
春近し一人でこなす露天商
分け入ればふくら雀は朝へ散り

和歌山　南條きわゑ

さいたま　秋谷風舎

所沢　飯室夏江

さいたま　石関六弦

目瞑りてなほ光りくる大旦
女正月ネイルに躍る達磨かな
日脚伸ぶ運河起点の徒競走
淡淡と照らす来し方冬桜
ふくれ餅怒れば腹の減る同士

大阪　遠藤人美

正月や蕎麦に昼酒それも良し
大欅揺れず靡かず寒に入る
おみくじの小吉引いて松納
能登襲ふ災禍噛み締め松納む
初凪や地球は丸し犬吠埼

さいたま　門真宏治

初凪に激震走る能登の街
初凪に賀状の届くスマホかな
ほろ酔ひの族帰りて松納
松納収集所にて積まれけり
冬の海身を委ねたる五能線

木谷葉子

初凪や光の中の貨物船
風強きビルの谷間の猿廻し
松過ぎや珈琲店の鳩時計
お茶請の九谷の小鉢女正月
地吹雪を抜けて見え来る我家かな

石井直子

獅子舞に出会ひて嬉し一番句
初東風の暖簾靡かせ商売繁盛
北風強し能登に吹くなと祈る吾
獅子舞の明日の疲れを思ひやる
獅子舞の中はイケメン見惚れたり

さいたま　小田三茅

青青と秩父の空や寒の梅
故郷は母ありてこそ冬の梅
鰭酒や蘊蓄多き男下戸
鰭酒やトロフィー並ぶ店の棚
鰭酒に火男顔がおつとつと

森　和子

新年や氏神様の鈴清か
親子凧一直線に天高く
笑顔よし福娘より福笹受く
保護猫の餌を横目に寒雀
縁結び六十余年福寿草

和歌山　嶋田洋子

冬木立つ絹綿被る蕾付け
幸あるや三椏の冬木友と撫づ
風まとふ欅冬木の並木道
初夢や日本沈没途中まで
初夢やアラーム音の下に消ゆ

さいたま　前田英子

初夢やかすかに聞こゆる母の声
初夢や富士の麓のジップライン
毛糸編む薬缶の音の静かなる
冬木道電飾眩しき新都心
犬と子らくるくる回り大冬木

さいたま　樋口元美

年の瀬や書肆に立読む週刊誌
更けし夜に辞書をたよりに賀状書く
年の暮吾子のバイトはガラス拭き
初夢やフォルン奏づる孫娘
パートごと音を整へ初稽古

武田重子

初夢やじんべいざめとキスをせり
元日や五年日記に「激震」と
筆無精の友旧制の年賀状
拭く窓に初東雲の溢れくる
荒れたる庭を見えぬふりして去年今年

北出久美子

少しづつ数のへりゆく年賀状
初詣合格祈願は神だのみ
それぞれの気力集まり初句会
冬休みたつたひとりで孫来たる
元日に大地震ニュースとびこめり

鬼石　榊原聰子

人中に花束のごと破魔矢抱く
初富士やぐつと近づく晴れの土手
台に立ち破魔矢を飾る目の高さ
頃あひに地物さげゆく年賀かな
初富士や宿場の町を抱きにけり

さいたま　篠原さよ子

コンビニにくゆらす煙草大晦日
正月や商店街のホームレス
ねこの目の乙女と猫のお正月
三が日中華そば屋のうすあかり
冬至風呂女のため息ゆげに消ゆ

大阪　飯塚智恵子

めでたさも漆器も仕舞ひ松納
お隣りと初の挨拶松納
初凪や箱根の走者士気高し
初凪や碧き地球を守らねば
まだ五時と蒲団引き寄せ一眠り

さいたま　三浦真由美

竹馬の父さんわたしに代わつてよ
竹馬や得意げな子と背くらべ
ひとひらと空埋める雪数へをり
街灯の切り出す三角小雪散る
傷口を白きで覆ひ能登の雪

東京　山中いちい

早朝の元気の声よ寒雀
水仙のほのかに香る仏間かな
地面よりそつと顔だしふきのたう
紅梅や曽孫の笑顔ハイタッチ
空オケも昔の歌よ新年会

鬼石　加藤ナヲ子

墨蹟（ぼくせき）は〇△□（まるさんかくしかく）除夜の鐘
元旦や言葉失ふ大地震
九十五歳雑煮の餅は四つ切りに
女正月呵呵大笑の軸の前
正月が吹き飛んでゆく事故多発

藤沢　小島喜代子

若水を母の遺せし黄のばらへ
凧揚げの男の子の視線一直線
羽根の音こんこん響く路地の奥
元日は昨日の続き明日の前

東京　畑宮栄子

撮りためし映画のひとひ小正月
明日あれと些少の募金冬灯
箱根路を抜きつ抜かれつ息白し
すすめられ炬燵に入りて仲間入り

さいたま　羽島秀子

やはらかな父の匂ひや枯野原
寄り道の珈琲熱し寒明くる
玉砂利の淡く光るや春時雨
春の日や子供一人で歩道橋

さいたま　小山あつ子

眉引いて成人式へいざ出陣
ざんげ坂斜め斜めの初スキー
寒鴉最寄の駅のない暮し
振袖に運動靴や成人式

山下ユリ子

初富士や白無垢に誓ふ永久の愛
初富士の変はらぬ姿に嫉妬して
調宮帰れば破魔矢居場所なし
初あかりつまらぬ喧嘩でまた逃し

川島夕峰

初鳩や顔上げていざ大空へ
小正月葉書に込めた「元気です」
大初日甲板溢るる銀飛沫
「年男」六十過ぎて厄も無く

草加　持永喜夫

外苑の冬木明るし初トライ
剥き出しの命のかたち冬木立つ
冬木道競歩離脱者深呼吸
初夢や十五の吾の宝箱

さいたま　横山礼子

初夢や十八歳の脹れ面
初夢に力士面々仁王立ち
戦争も災害も否冬木立つ
冬ざれや居間の賑はふ電子音

糸井しるく

冬夕べ東の空に白き月
足音に鳥とび立ちぬ万両や
冬の空天気うかがふ通院日
文旦や見上ぐる塀の散歩道

東　京　大島千恵

地震に負けぬ残りし醪寒造り
改めて二人向き合ふ雑煮かな
淑気充つ長き参道鐘遠く
糸いつぱい張り切り空へ凧

さいたま　駒谷行雄

寒梅にピアノ奏づるメゾフォルテ
呑みつぷり誉めて鰭酒盛りあがる
寒梅に一枚羽織る散歩道
寒梅に誘はれ歩む試歩の杖

さいたま　落合和枝

青竹や竹馬作りし爺の指
竹馬や競技となりて子の転くる
孫の住む地に近づくや雪多し

東　京　深沢りこ

八十路秋長居の藤沢富士が友
東海道行つたり来たり春職場
城好きや大阪城の秋倉庫

藤　沢　藤田寛二

主宰が添削をしている句があります。
提出した句を思い出して勉強して下さい。

☆　☆

作品評

山本鬼之介

寒林の踏み入る先の瀬音かな　新　暦文

本句の季語「寒林」は、主題として掲載されている歳時記が多いが、冬木立の傍題として載せている歳時記もある。筆者としては、その語感から判断しても後者の扱いには納得しがたい。寒林は冬季にすっかり葉を落とした落葉樹の林のことであり、それだからこそその景色を通して冬ならではの淋しさが伝わってくるのである。

さて、作者が足を踏み入れた寒林もその名の通り、聞こえてくるのは、足を運ぶ度に発する落葉の音と寒禽の声、そして、木々の枝を通り抜ける風音であろう。しばらく枯木の林を進んで行くと、彼方より水の流れる音が聞こえてきて、寒々とした枯木の林が活気づいたように思えた。しばらく歩いて行くと林が尽き、そこにひと筋の流れがあった。

可杯で享くる年酒の無礼講　菅原卓郎

「可杯＝べくさかずき」は日常では聞かれない言葉であり、底に小さな穴が開けられていたり、底が尖っていたりして、飲み干さないと下に置けないようになっている杯のことである。酒の席で、常に手に持っていることになるから、どんどん酒を注がれてしまう。酒好きで酒に強い人ならよかろうが、そうでなければ一ころである。下五の「無礼講」から察して、『いやー参った参った』と言いつつも、可杯を放さない飲兵衛の様子が伝わってくる。

話が替わるが、むかし筆者が現役の頃、銀座にある土佐料理の名店「祢保希（ねぼけ）」で顧客を接待した時のこと、座を賑わそうと天狗とひょっとこの可杯が用意されたのはよかったが、酒に弱い資材部長が怒り出して、それを宥めるのに苦労した苦い想い出がある。

冬の蝶二頭で飛んでゆきたまへ　菅原真理

動物でない小さな蝶をなぜ「頭」を付けて数えるのかは省くとして、秋から冬を迎えてその姿がさらに弱々しくなり、今にも潰えそうな蝶に対して、作者の最高の思い遣りの気持が現れている。一頭では心細いが、番の二頭であれば力が湧いて前途が開けてゆくように思える。「ゆきたまへ」が、強力なメッセージである。

初夢や幼き頃の家の間取り　岡田宣子

掲句の句意は、初夢の中に幼い頃に住んでいた家の間取りが現れたということで、単に間取りだけだったのか、それとも部屋の中に人が居たのか、居たとしたらそれは昔の家族だったのかなど、次々と質問してみたくなる。今現在の作者が、むかし居た家の部屋を一つ一つ思い出に耽りながら回っているとすればなお一層興味が湧く。何れにしろ興味津津の夢である。

初景色ただ一筋の雲を追ふ　篠﨑紀子

よく晴れた元日のひと時、年末に磨いた自宅のリビングの窓から空を眺めていると、上空の風に千切られたいろいろな形の雲がゆっくりと流れてくる。その中の筋状になった雲の一片に何故か興味を覚えてその行方を目で追っている。広い窓からそれが消え去るまで…。

初富士や明日は箱根へ勝ちに行く　小林京子

本句は、「東京箱根間往復大学駅伝競走」俗称「箱根駅伝」をモチーフにしたものと思うが、記念すべき今年の一〇〇回目の大会で青学がその実力を多くの人々に示した。往復距離二一七・一㎞を、各校伝統の襷を繋いで走り抜く苛酷なレースで、参加校選手一人一人がそれぞれ闘志を燃やして臨む元旦の心境を、作者小林京子が力強く代弁している。純白に輝く初富士が、分け隔てなく全選手を応援している。

元旦の澄みわたる空とこしへに　山岸久美子

日本国内は政治問題や値上げラッシュによる物価高騰など、陰鬱なムードが漂っているし、国外においては、引き続く戦乱が全世界の人々の心を暗くしている。そのような環境の中で、作者の目に映った元旦の澄みきった空は、嫌なことを何も彼も忘れさせてくれるように素晴らしく、永遠にこの日の空が続いて欲しいと掌を合わせたくなる空であった。

やがて来る季節の遣ひ福寿草　元田亮一

正月の花として親しまれている福寿草であるが、それを鑑賞する人それぞれによって、細かな思いは違ってくるのであろう。この句の作者は、冬を越してやって来る春に先駆けて咲いている花と見ている。一日一日と春が近づいてくる。

床の間の脚光のごと福寿草　反町　修

「脚光を浴びる」という言葉がよく使われるが、「脚光」そのものについては詳しく理解していなかったような気がする。掲句の意味を理解する上で改めて辞書を引き納得した。床の間に掛けられた軸の前面に置かれている福寿草。作者の目には、福寿草が大スターである掛軸を照らす脚光のように見え

たのである。

風花や天界からの散華とや　清水桂子

天気が良いのに雪片がちらちらと舞ってくる風花である。「何で」と初めは驚くが、遠い雪国から山々を越えて飛来した雪であると知ると、とても愛おしく思えてくる。衣服や掌に載った風花は直ぐに消えてしまい、哀惜の情が深まる。作者は、この風花を天上界から撒かれた散華であると、厳かに表現している。であるから、風花に遭遇した時何故か倖せな気持になるのであろう。

凍蝶やうすむらさきに透けゆけり　西幅公子

冬に見掛ける蝶には秋の蝶より更なる憐れさを感じるが、同じ冬季の蝶でも凍蝶は厳しい寒さを迎える晩冬の蝶を表す季語であるから、その姿にことさら憐憫の情を覚えるのであろう。飛ぶ状態よりも何かに縋り付いたり、地に落ちて地面を這っている姿を見る方が多いのではなかろうか。掲句の凍蝶は、残された力を振り絞って飛んでいる。そして、西に傾きかけた陽射しを浴びて、作者の目には薄らと紫色に輝いているように見えたのである。

海と城ともにある町初景色　丸屋詠子

嘗ては、国内に海に直面した海城が幾つもあったそうで、高松城・今治城・中津城が今もって三大海城と言われている。小田原城もその一つで、作者の居住地から判断して、この句のモデルは小田原市かと思われる。その昔、城の主が天守から町並と海を見渡し、満足げに頷いたことであろうが、元日の初景色となれば格別なものであったろう。作者もそれと同じ気分を味わっているのかも知れない。

亡者送り電気ブランは三杯目　皆川更穂

「亡者送り」とは、一月十二日から十八日までの七日間、東京の金竜山浅草寺において行われる年頭の厳粛な行事である「温座秘法陀羅尼会」のことで、結願の最終日には一般信者も参加できる。多分作者はこの行事の経験があり、その時浅草一丁目にある「神谷バー」に立ち寄り、名物の電気ブランをじっくり味わったのであろう。ちなみに、この店は明治十三年の創業以来続いている老舗で、今では電気ブランや料理の品数が増え、客層も多彩である。さぞかし快くご帰館されたことであろう。

初景色門を入らぬ象の尻　森下山菜

作者がいつの日かどこかで実見した光景なのか、それとも、想像によるものかは不明であるが、如何にも長閑で心の和む

初景色である。門を入る直前で飼育員が諦めたのか、象の尻が門に挟まってしまって二進も三進も行かない状態なのか、読者はいろいろ想像して楽しめるだろう。

水仙や初めて触れし白き指　千坂平通

野に咲く水仙か、それとも、屋内に活けられている水仙か。その種類にもよるが、水仙の花言葉を調べると、「自己愛」「うぬぼれ」「神秘」といった文字が出てくる。本句との直接的な結びつきは無さそうに思えるが、水仙をじっくり観察していると、何となく頷けるような気がする。

さて、「触れし」を文法どおり解釈すれば、作者が過去に偶然触れた或る女性の指を回想したものと受け取れる。

しののめや破魔矢の鈴のかろき音　池田珪子

正月の初詣で買い求めた破魔矢が自宅の居間に飾られており、それに付けられている鈴が何かの震動で鳴ったのであろう。日常の些細なできごとなのであるが、「しののめ」という優雅な言葉によって、鈴みずからが発した音であるかのように感じさせるところに掲句の非凡さがある。

人波に飲まれ浅草切山椒　阿部幸代

上新粉に砂糖と山椒の粉を混ぜて搗き、一チセンくらいに伸ばして拍子木状に切った柔らかく薄甘い餅菓子である「切山椒」は浅草の名物で、正月に浅草寺に初詣して切山椒を買う人が多かったが、近年の嗜好の変化によるものか購入者が減ってきたようで、今では商う店が限られたと聞いた。作者もこの菓子の愛好者で、正月の浅草の人混みに呑まれながら買いに行ったのであろう。

早梅や稚のほつぺの紅濃やか　霜多光代

機嫌のよい時、むずかって泣いている時、赤子の頬は紅く輝いている。春を待たずに咲く早梅のように、小さな身体から漲る力を感じさせる稚のほっぺたである。

被災地のがれきの中の福寿草　梅澤輝翠

今年の元旦の午後、思いもよらぬ能登大地震が発生して多くの尊い人命が奪われ、数多の建物や自然を損壊する被害が発生した。生き残った福寿草が復興の礎である。

心音の奏づるリズム去年今年　越田栄子

心音の正しいリズムは健康の証であり、元気の源である。心音の快いリズムを確認して晴れやかに越年する作者である。今年も元気に暮らそうと、深呼吸している。

水琴窟

（二月号鑑賞）

池田雅夫

立つ熊の人間臭きクマ牧場　吉川拓真

北海道の「クマ牧場」には大型の羆（ひぐま）が飼われている。本州の月の輪熊より大きく性格も荒いといわれている。餌をねだったり、人間を見てパフォーマンスに立ちあがったのだろう。「人間臭き」に、むしろ熊が観察しているのかも。

生まれ来る子の名あれこれ小六月　杉浦千祐

「生まれ来る子」に名前をつけるのは大役である。昔は祖父母に依頼したものだが、近年は親がつけているようだ。季語の「小六月」からして、やはり祖父母の役目と解釈したほうが趣がある。字の画数など「あれこれ」思い巡らすのだ。

吊り橋は定員五名谷紅葉　森下美智枝

四国の祖谷の葛橋に限らず、山深い渓谷には「吊橋」が架けられている。強固なものから簡素なものまでさまざまである。「定員五名」であるのでさぞかし揺れるのであろう。

竹林のこすれ合ふ音秋の風　畠中八重子

手入れのゆき届いた「竹林」は、傘を差して通り抜けることができるほどの間隔に切り整えてあるという。よほど強い「秋の風」に「こすれ合ふ音」がする。そこに緊張感がある。

初霜や鼻息荒き都井の馬　松村笑風

宮崎県の都井の草原には野生の岬馬がいる。暖かい宮崎でも「初霜」が降りたのだ。「鼻息荒き」に馬の逞しさが表われている。「息白し」としたいところをあえて、「初霜」で詠んでいるのは、初霜の印象がよほど強かったのだろう。

初冬の庭や寂れて来たりける　高原和子

華やかな紅葉が終り、いよいよ冬の気がただよい始めた庭に、もの淋しさを感じながら眺めているのだ。「寂れて来たりける」庭の様子を具体的に示すことで、より共感を得ることができる。たとえば「寂るる庭をたたく雨」のように。

笹の葉のそぞろ流るる神無月　秋谷風舎

「笹の葉」の流れる様と「神無月」との因果はとくに見当たらないが、なぜか惹きつけられる不思議な句である。それはきっと神々が笹舟で出雲へ旅立たれたと思えるからか。

つるし柿甘くなれよと呪文かけ　嶋田洋子

和歌山では「串柿の玉すだれ」などといわれる名産の「つるし柿」。本来、柿は渋柿が原種で甘柿の種類は少ない。渋柿は干すと確実に甘くなる。「甘くなれよと呪文かけ」に、柿の一つ一つていねいに手をかけている姿が目に浮かぶ。

今朝の冬厨仕事の指の荒れ　羽島秀子

「厨仕事の指の荒れ」に悩まされている。今日から冬であり、いよいよ胼や皸の季節が来たことを憂えているのだ。厨の水仕事は避けるに避けられないもので過酷でつらい。その覚悟を自分自身にいい聞かせているのだろう。負けるな‼

一撃に新たな廃墟冬の星　岡田芳春

「一撃に」は、一連の句から中東イスラエルの紛争であると理解する。悲惨な報復戦が続き犠牲者が絶えず、数多くの死者が出ている。街は砲撃で「廃墟」と化す。そんな状況を憂え、「冬の星」に救いを求めているのだろう。

冬晴れや筑波の山の迫り来る　綿貫ひさの

関東平野の東側に位置し、独立峰の筑波山。「冬晴れ」に凜と聳える「筑波の山」が間近に「迫り来る」のだ。くっきりとした冬晴れの筑波山に心が洗われる思いである。

赤き橋潜り江ノ電萩の古寺　関谷多美子

鎌倉の極楽寺にある「櫻橋」は「赤き橋」として知られている。赤い橋のその先には「極楽寺坂切通」がある。「極楽寺」の白萩の花はみごとで「萩の古寺」にふさわしい。その情景を目に浮かべるのは読者に共通するものであろう。

木の葉落ち水面に泳ぐ鳥のごと　大島千恵

「～のごと」と直接比喩することで強く印象づけることができる。「～のやう」も同様である。それを踏まえてもう一歩深く推敲することも大事である。たとえば語順を変えたり、時には事実でないことを言い表わすのも楽しみの一つである。

窓開けて神頼みする今朝の冬　緒方みき子

「今朝の冬」は立冬の日の朝をいう。この月は陰暦で「神無月」といい、神々が出雲へ旅立たれ不在になる。そこで出雲の方角の「窓開けて神頼みする」のである。日常の暮らしに滑稽さを失わない生き方に共感する。季語がいい。

羽広げ鴨早朝の身繕ひ　深沢りこ

「羽繕ひ」といわず「身繕ひ」としたところに工夫がある。「羽広げ…羽繕ひ」ではあたりまえすぎてよくない。「早朝の身繕ひ」に観察の確かさがうかがえる。鴨の身嗜みか。

大村節代　選

鼓笛集

参道のうす日の透くる初音かな　霜多光代
春時雨二人揃ひの白脚絆
紅たすきの大原女の往く花菜道

天草の春の海より娘婿　元田亮一
受験生母と乗り込む埼京線
死語探す帝釈天の春日和

束の間の帰郷叶ひたる早春　丸屋詠子
いかほどに梅は咲きしか足早む
蜥蜴出て尾つぽを踏みにくる子供

春風が優しく撫づる輪島塗　綿引まりこ
春の雲牛の歩みと揃へけり
春コートパリの小道を闊歩する

友の死を知らせる葉書いぬふぐり　山中いちい
春まだき母校に探す友の影
友の墓所訪ぬる旅や春浅し

咎なくも鶏殺処分辛夷咲く　本橋稀香
春蘭をじじばばと呼ぶ山路かな
祖母愛でし梅の古木の今朝真白

春近し熟女の童謡響きけり　南條きわゑ
高尚な指導仰ぐや春来る
白梅や犬の散歩の美少年

受験終へ笑まふ少女の糸切歯　森　和子
梅ふふむ赤子は拳振り回す
月光を集め膨らむ雪柳

両腕のずつしりこたへ春の雪　榊原聰子
二歳児のパパ用かじる恵方巻
大試験弁当のなかに「ガンバレ」と

春一番燥ぎて駆くる児ら五人
暖かや不意の便りは従姉妹から
グーチョキパー下校の子らの木の芽径　綿貫ひさの

雪霏霏ところばぬやうに心して
道の左右に水仙群れて歩が進む
房総に見ゆる幸せ蜃気楼　森下美智枝

春きざす姉の選びし赤い杖
噴水の弧に光あり風のあり
花芒体温残る別れの手　小山あつ子

単色の沼の漣春浅し
紅梅の光集めてなほ紅し
二輪のみ白きを抱き八重椿　横山礼子

春日差す象の尻尾にやはらかき
春の山吾子のリュックはうす緑
糞をする猫にもの言ふチューリップ　川島夕峰

銅鏡の銘の際立つ余寒かな
春浅き茶飲み話の苦みかな
かげろふの猫に一声犬猛る　遠藤人美

鼓笛集作品評

大村節代

参道のうす日の透くる初音かな　霜多光代

社寺に参詣するための参道には、道の両側に神木が植えられている。

木々から洩れる薄日に、御参りの気持が一歩ずつ増して来る。さらに誂え向きに、春告鳥の声が加わり、何やらご利益がありそうな……。

受験生母と乗り込む埼京線　元田亮一

中七の母と乗り込むによって、高校受験では母親はむしろ邪魔臭いので、やはり、小学校か中学校受験と思われる。そして母と子の緊張感が伝わる。

埼京線は東京と埼玉を行き来する鉄道なので、東京の学校を受験するのであろうと想像がつく。

蜥蜴出て尾つぽを踏みにくる子供　丸屋詠子

その昔、ああこんな風景を見たと思った。蜥蜴は尾を踏まれたり、捕まえられたりすると、尾を自切して逃げる。切られた尾はまた再生されるという。人間もいつの間にやら尾が無くなってしまったが、遠い未来に小さい尾を再生したら楽しいとふと思った。蜥蜴は夏の季語。一・二句は早春季語なので、残念乍ら三席に。

鼓笛集巻頭（三月号）

私の好きな一句（自句自解）

菅原真理

先斗町を語るマダムや夏の雨

京都旅行中ひょんなことから知り合ったバーのマダムでした。先斗町小路の話や京都に出て来た行きさつ等、マダムの述懐は私にはとても魅力的でした。そんな静かな語りを、夏の雨がやさしく包んでくれてました。

❖原稿募集

季　音（雪・月・花）五句　（巻末添付用紙）
水明集　五句　（　〃　）
山紫集　一句　（　〃　）
鼓笛集　三句　（編集部より依頼のあった方）
※二百字詰原稿用紙使用。
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着
原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一

埼玉県芸術文化祭二〇二四協賛事業 第四十六回 埼玉俳句大会作品募集

本大会は埼玉県現代俳句協会が主催する俳句大会です。俳句を愛好する方々の応募、参加を心よりお願い申し上げます。お誘いあわせの上ご参加ください。協会員以外の方々のご参加を歓迎いたします。

◎大会要項

日　時　令和六年七月十五日（月・祝）受付開始十時・開会　十三時三十分
会　場　さいたま文学館・文学ホール＊JR東日本 桶川駅西口下車徒歩約五分　埼玉県桶川市若宮二丁目五－九　℡〇四八－七八九－一五一五
講　演　八木橋伸浩先生（玉川大学名誉教授）演題　俳句季語「相撲」と「相撲」の考現学

◎事前投句募集要項

作　品　二句一組・何組でも可（未発表作品に限ります。前書、ルビは認めません）
投句料二句一組につき千円（必ず句稿と定額小為替等を同封してお送りください。投句料のないものは無効とします）
締　切　令和六年五月十日（金）（必着）
投句先　〒三三七－〇〇四三　さいたま市見沼区中川四四〇－一五　染谷風子方
埼玉俳句大会係（℡〇九〇－九三一一－四九五六）
予定選者　後藤　章　網野月を　島田妙子　桑原三郎　石　寒太　岩淵喜代子　中村武男　関田　誓炎　山崎十生　加藤いさむ　堀之内長一　杉本青三郎　山本鬼之介他

句集喝采

曲淵徹雄

◆松澤　雅世「陰陽」

四季書房

著者略歴　昭和四十七年「四季」入会。「四季」編集同人、編集長を経て平成七年副主幹。平成十六年主幹。句集『蓮華始末』・『現代俳句の新鋭』・『遠』・『萠芽』。賞　四季賞・宅居賞・現代俳句協会賞。現代俳句協会評議員。常任顧問。日本文藝家協会会員。国際俳句交流協会会員。俳人「九条の会」会員。

本句集は、「四季」創刊六十周年記念出版として上梓したと「あとがき」にある。前句集『萠芽』以後二十年の二一二句を収載。

はなびらにみづいろとなる掌
鏡餅ひび割れてゆく底力
流燈のはたてはだれもみてをらず
白牡丹ひかりまんべんなくほどけ
神託かしら白梅のひらく音

以上、写生を基本に抒情性ゆたかに詠まれた句から五句。

身の壺のどこを押しても氷點下
春じや春じやと靴下の穴
戦とは向日葵の種ひとつから

以上三句、対象を捉える鋭い視線と感性で詠まれた句から。

春の泥つけて百まで生きられる
儚なくはなし福は外鬼は内

これからも写生・心象が一体となる俳句の道を邁進されることであろう。

◆高橋亜紀彦「異邦の神」

朔出版

著者略歴　平成十六年「祭」入会。「金木星」「いつき組」「里」を経て、平成二十四年「藍生」、「紫」入会。同年句集『蘭春』。平成二十九年紫賞新鋭賞。句集『石の記憶』。「銀化」入会。平成三十一年「雪華」入会。令和四年「篠」入会。令和五年現在、「雪華」同人、「紫」同人、「篠」会員。現代俳句協会会員。

著者の第三句集。句集の扉に「亡き妻　景子へ」、また「妻は、私のすべてであった」と「あとがき」に記す。二〇一八年から二〇二三年の三九〇句を収載。句集名は「元旦や異邦の神に祈りたる」より。

うららかや妣の坐椅子に妻の坐す
病む妻に生かされてをり根深汁
吊忍妻がわが名を忘るる日
逝く秋や妻の瞼を指で閉づ
気の利かぬ亡妻（つま）だと屠蘇を手酌する

以上、最愛の妻を詠んだ心うつ多くの句から五句。

信仰を詠へぬ鴉ゐて秋思
妻一人守れず何の耶蘇冬至
鍋底を束子で擦る原爆忌
あたばうよ唐変木め江戸の暮

以上、第一句、第二句、信仰と向かいあう著者。第三句、第四句、ドラマ性の浮かぶ句より。

菜の花や人みな明日を諦めず

網野月を　選

山紫集

まだ色を持たぬ波音初日待つ　越田栄子

観音の千手隈なし初日影　大場順子

初日さす歓楽街に猫二匹　綿引まりこ

仕舞ひそこねし蕎麦屋の暖簾初日影　正木萬蝶

覚めやらぬキャラメル工場初日の出　阿部幸代

初日浴ぶ原宿駅の用務員　池田珪子

山峡の初日迎ふる東天紅　反町　修

波音も鷗も序曲初日出づ　本橋稀香

それぞれに原風景の初日かな　篠原さよ子

調教の馬常なるや初日の出　秋谷風舎

――以上特選

絵馬の竜ごそごそ出で来初日浴ぶ　髙橋満耶子

人々に公平無私の初日かな　武田重子

初日差す明日の禍福隠し持ち　田中章嘉

初日影マンション群を筋違いに　寺内洋子

安穏を信じ見上ぐや初日の出　飛永　鼓

初日受け歩数増やすや百寿迄（ももじゅ）　南條きわゑ

山頂に静かな気迫初日かな　西幅公子

柴犬の黄金に光り初日の出　野口和子

走り込む子の伸び代に初日影　野田静香

高みから願ふ良き年初日の出　野平美紗子

灯台や海の向うの初日待つ　野村美子

初日さす富士の白さは一段と　畑宮栄子

拝(おろが)みて二度寝に入る初日かな　原田秀子

真つ直ぐに差し込む初日手に受くる　樋口元美

諸人に等しく届け初日の出　日高道を

肩寄する村の小舟や初日影　檜鼻ことは

退院の予後を初日に祈りけり　福田千春

父母の皺に染み入る初日かな　保坂翔太

迎へたる八十路まぶしき初日かな　曲淵徹雄

おのづから畏みて待つ初日の出　松井由紀子

赤富士の軸は眩しき初旭　松宮保人

初日影京の赤かぶ膳に置く　松本光子

初日の出岬に響く愛の鐘　町野広子

潮騒と共に待ちたる初日かな　丸屋詠子

無窮の空一気に染むる初旭　丸山マスミ

まほろばに初日めでしや能登の地震　宮崎チアキ

大初日甲板覆ふ大漁旗　持永喜夫

初日の出鳥居に投げる細石　元田亮一

磨き上ぐ初日眩しき厨窓　森　和子

カーテンを濃く染めはじむ初日の出　森川義子

初日今九十九里浜輝けり　森下美智枝

池の端の鳩と目の合ふ初日の出　森美枝子　雲龍に射せる初日や宇宙戦　飯塚智恵子

神秘なる初日の光地に充てり　山岸久美子　万物に威風堂堂初日かな　池田雅夫

初日の出港へいそぐ大漁旗　山下ユリ子　初日さす半紙にさらり「さやうなら」　石田慶子

口々にほうと声する初日なり　山中いちい　初日差す浅くなりたる父の息　石川理恵

初日承け光をまとふ赤子かな　湯浅　和　一島を神となす浜初日受く　井上燈女

参詣の帰路は初日の見ゆる坂　横山君夫　燦々と庭松てらす初日かな　井上玲子

山上に時満つを待つ初日かな　横山礼子　裏山の名も無き石も初日影　上戸千津子

伝染の如く火照るは初日かな　吉川拓真　初日影バベルの塔のようなビル　内田恵子

ビルの谷抜けて自転車初日の出　青木鶴城　庭にて拝手ビルの谷間の初日の出　梅澤輝翠

初日さす決意新たや必の文字　新　暦文　一筋の道を未来を初日燦　梅澤佐江

初日の出武州上州海もたず　荒井倶子　真向ひのビルの硝子に初日射す　岡田宣子

幾年の初日になるや春待たん　飯田忠男　あらたまの初日きらめく光堂　加藤でん治

年重ね初日拝んで床に着く　川島夕峰

初日さす能登をまさかの地震襲ふ　熊倉千重子

瞳とぢぢつと初日にゆだねをり　河野はるみ

初日の出必ず見ゆる雲の上　小駒さち子

瑠璃色の空海分かつ初日かな　小林京子

初日なり百年を越え生きるやも　小山あつ子

初日待つ犬吠埼の大湯槽　近藤徹平

初日の出四方の山の端近づきぬ　榊原聰子

初日の出富士ほんのりと染めるなり　佐々木史女

初日待つ潮騒聞きつ安房の宿　笹本啓子

初日浴ぶいつも笑顔の野の地蔵　篠﨑紀子

初日燃ゆ五尺二寸の老いに力　渋谷きいち

天仰ぎ五臓六腑に初日受く　嶋田洋子

かけ流しの露天風呂より初日の出　清水桂子

川風に泳へて仰ぐ初日の出　下川光子

初日影古金煌めく鳳凰堂　霜多光代

水煙を燦と初日の上野山　菅原卓郎

ビルの街合はせ鏡の初日影　菅原真理

初旭浴びて仕事へ胸を張る　杉浦千祐

ビル影を残したままの初日の出　鈴木藻好

鎮守社の木の間ゆらゆら初日かな　鈴木玲子

旅立ちし父母よ江ノ島初日の出　関谷多美子

穏やかな初日揺るがす震度七　瀬戸雄二郎

日出づる国に燃え立つ初日かな　染谷風子

山紫集作品評

網野月を

まだ色を持たぬ波音初日待つ　越田栄子

色、音の修飾関係が面白く、且つ微妙である。「波音」は「の」の省略された形ということにして「波の音」とすれば、まだ視界に確と認められない波ではあるが音だけは聞こえて来ると解釈できる。ただそれでは面白くないのである。「初日」と共に波音の音色が変わるように作者には聞こえるのであろう。音色が変わって、「色を持」つようになるというのである。そこには多分に心象的な側面が加味されている。視覚で確認するとその音も又ある種の形を以って聞こえて来るということである。「初日待つ」と共に波音の変化を聞き逃すまいとする作者の心の機微を詠んだ句である。

観音の千手隈なし初日影　大場順子

千手観音像の一臂は、二十五の腕を表現しているという。それでも四十本の臂を有する像は、人々の観音への願いの深さを投影しているのである。その数多の臂に隈なく初日が差しかけている。少々出来過ぎている。理想の世界を描き出している世界を描写することが許されているのではないかと筆者は考えている。「観音」なら「初日」なら猶更である。作者にその様に見えるのは、信心の深さの所以であろうから。

初日さす歓楽街に猫二匹　綿引まりこ

二匹は雌雄であろうか？　早々と恋猫の季節がやって来ているのかも知れない。擬人法と捉えれば、大晦日から元旦迄オールナイトしてしまった二人連れとも考えられる。いや二匹ともに雄猫であろう、と筆者は考える。とすれば恋敵同士傷をなめ合っているのである。

仕舞ひそこねし蕎麦屋の暖簾初日影　正木萬蝶

ありそうでない、なさそうである事柄である。実景か虚構か分からないが、「そこねし」の措辞にこの「蕎麦屋」の繁忙を極めた後の正月の安堵感が滲み出ているように思う。上句の字余りが大晦日の忙しなさを演出している。

覚めやらぬキャラメル工場初日の出　阿部幸代

中七の「キャラメル工場」は「キャラメルこうじょう」もしくは「キャラメルこうば」であるが、筆者は「こうば」と読みたい。「こうじょう」の読みは文字数的には中八であり字余りになるのだが、二つの長母音がはいっている音価であ

り中七をキープして披講することも可能であろうと考える。「こうば」の読みを支持するのはその読みに含まれる語感を念頭に句の示している空間を想定したからである。また蝋紙に包まれた甘い夢という子供の頃の時間を回想したいからである。

初日浴ぶ原宿駅の用務員　池田珪子

「原宿駅の用務員」にとっては、徹夜仕事明けとなった翌日の朝日なのである。さぞ眩しいであろう。JRに「用務員」なる職掌があるのか、筆者は不勉強のゆえ知らないのだが、「用務員」という措辞のはぐらかした言い方が、何とも大時代的諧謔に響くのである。渋谷駅でも浅草駅でも同様の事態が想像されるのだが、ここはやはり「原宿駅」であろう。

山峡の初日迎ふる東天紅　反町修

鶏鳴はまだ暗いうちから鳴き始めるものである。「迎ふる」と表現しながら、「東天紅」が「初日」を誘い出しているくらいな具合で、「初日」の露払い的な存在なのかも知れない。「山峡」では、海辺や平野部よりも日の出が遅くなるのだろう。山の端や峡の空は既に明るいのに、峡にはまだ日が差し込んでこないのを焦れているように鶏が叫鳴しているのである。

波音も鷗も序曲初日出づ　本橋稀香

「序曲」は初日の前段階という意味であろう。「波音」がして「鷗」の姿が見えはじめるのであるから、海浜の「初日」なのである。仄明りの中で寄せ来る波を見て鷗の声を聞いていると明け方に近いことが意識されてくる。身も心も「初日」を望んで、その一瞬を待ち構えている。

それぞれに原風景の初日かな　篠原さよ子

「初日」を見ていると「原風景」を思い出しますね、という句意なのである。人が「初日」に臨んで自らの「原風景」に思いを馳せるということである。「原風景」に思い至ること必至であるということにもなるであろう。上五の「それぞれ」は「各々が」の意味ではなくて、人という生きもの「すべて」の意味である。

調教の馬常なるや初日の出　秋谷風舎

中七の「馬」の後に切れが生じている。いわゆる句跨りの句になっている。人間界は正月の「初日の出」を祝っているのだが、馬匹に至っては常の朝日に変わらないという句意であり、人間の営みの複雑で面倒な理に比して、馬に代表される自然界の単純簡潔を捉えている。一方で、人の洗練された生活観に比して、自然の原始的感覚を取合せていると言っても良いだろう。中七に「……や」の切れ字がある分、自然界の崇高な摂理を憧憬する心の方が強いように読める。

令和六年「水明忌」の記

日高道を

令和六年の「水明忌」が二月二九日、浦和コミュニティセンター第十三集会室で開催された。

ここ数日の強東風が一転、穏やかな日和での開催となり、「日永」「当季雑詠」各一句、四十一名の参加者による八十二句での句会となった。（実際は、八十三句の投句があり、詠み人知らずの句が最後まで一句残る不思議な展開となった。）

いつものように投句、清記、選句と慌ただしく経過し、いよいよ日高道を総務部長の開会宣言に続き、「水明忌」を修する長谷川秋子、星野紗一、星野光二の三代の主宰に黙祷を捧げた。

続いて、山本鬼之介主宰による、水明忌の原点である「如月忌」からの歴史を辿ったご挨拶を頂いた。

選句　主宰は多選

雪欄作家十句　一般参加者五句

披講　一般選　保坂翔太

雪欄選　曲淵徹雄

主宰選　山本鬼之介

主宰詠

ねた探す鵜の目鷹の目きさらぎ忌　道を

永き日や「残日録」といふ日記　喜恵

主宰選

三極（天・地・人）

天

衛兵の動くまで待つ日永かな　節代

地

初音聞くほかに音なき奥の院　公子

人

日永し五番目物の菩薩舞ふ　更穂

超特選

春一番老いて堂々盲導犬　昇

春眠の誘ふ時空を超ゆる旅　佐江

老いらくの恋を温むる春炬燵　美子

秋子忌や黒髪塚の影淡き　延昭

里山に和太鼓響く梅まつり　義子

日永し河馬が聞耳たててゐる

瀬戸内は光の海よ春の旅

特選

横笛を吹くをのこをり秋子の忌　月を

永日や寝たり起きたりまた寝たり　久夫

永き日の猫にあくびをうつさるる　かつ子

永き日や噂話に付く尾鰭　昇
古地図手に遊び暮れたる日永かな　風子
臥竜梅あめに気だるき香を放つ　桂子
梢から鳥の飛び散る日永かな　徹雄
頭髪の日毎淋しき如月忌　鶴城
猫の髭引つ張る老爺日永し　翔太
墓碑の文字なぞり無沙汰を春日影　和葉
秩父線途切れ途切れの春に会ふ　律子
稲荷堂の椿明りや日のやさし　光子
泡沫の未練と共に雪解川　道を

普通選

春光や言の葉きらら別所沼　はるみ
梅が香や窯元競ふ陶器市　修
永き日や栞を挟み大あくび　鶴城
姉妹して恋の話や花ミモザ　真理
ポケットに青春きつぷ春の海　翔太
筑波嶺に乳頭ふたつ春霞　徹雄
秋子が詠みし髪は妖艶きさらぎ忌　延昭
碁敵のながき迷想日の永し　義子
沼畔の樹樹黙りこむ余寒かな　由紀子
永き日の工事現場の弾む音　美子
永き日や午後の紅茶のおかはりを　桂子
風光る土手を二輪車音遥か　ひさの
コミセンが句会場なり如月忌　風子
永き日の何か動くや忘れ潮　マスミ
永き日の秩父連山指呼の間　倭子
永き日や丹塗りの鳥居補修中　でん治
永き日の咲き誇る園富士白し　和葉
読みをふる「夢浮橋」日永かな　節代
水明忌ゆつたり流るる春の川　律子
捨て舟の風と遊びぬ永き日の　美智枝
永き日や光の遊ぶ別所沼　佐江
永き日のかけ声ハモる市場かな　惠子
強東風の合間の日和忌を修す　光子
日永なり夕陽巻き込みうどん打つ　更穂
護摩焚きを静かに見つむ日永かな　風舎
将棋指す縁は日永やまた「待つた」　ひろこ
永日や朋と野面の連れしよんを　茂子
まん丸の埴輪の目口日永かな　宣子
捨てし句を拾ひ直すや永き日よ　徹平
杖ついて諏訪湖見下ろす日永かな　月を
永き日を一人将棋で時忘れ　京子
女優かと思ふ面輪や秋子の忌　喜恵
初恋のあとの長命日永かな　公子
春寒に耐へし樹々の芽無言なり　章嘉
食卓に春の馳走や香り立つ　千重子
二月はや主情詩人の秋子の忌　かつ子
時の鐘わたるお城下日永かな　久美子
別所沼日永の影の夫婦連れ　久夫

すべての披講が終了した後、主宰から全句の講評を頂き、特に歴史的仮名遣いにおける「し」の用法の間違いについてのご指摘をいただいた。

その後主宰から天地人の三極には色紙、超特選には短冊が授与され、互選高得点者には記念品が贈られた。

高得点者

一位　日高道を
二位　蛭田律子
三位　丸山マスミ
四位　五明昇
五位　森川義子
六位　保坂翔太
七位　清水桂子
八位　石山かつ子

最後に網野月を幹事長より、主宰への御礼と閉会のご挨拶があり、令和六年「水明忌」を終了した。

『俳　壇』三月号

私の本棚　私の一冊

山本鬼之介

本棚は、筆者が若い頃、次女の生誕を記念して勤務地の大阪で購入した本棚の部分に硝子戸がある結構立派な物であるが、二〇一一年三月一一日以来写真のように無惨な姿を曝している。筆者が留守中に妻が独りであの東日本大震災に遭遇し、ショックのあまり、大地震の再来を危惧して、書棚の本の殆どと硝子戸を段ボール箱に収納してしまったからである。元に復すると、大地震のような諍いが起きるので、必要なときは段ボール箱から本を取り出して何かと用を足している。

新國劇記録保存会『新國劇七十年栄光の記録』

今回筆者が紹介する本は、妻の手で段ボール箱に仕舞われることなく、そのまま本棚の最下段に置かれていた「新國劇七十年栄光の記録」と題する三一〇×二二五×五〇（箱入りミリ寸法）の大きくて重たい本である。

大正六年四月十八日、澤田正二郎によって旗揚げされた劇団「新國劇」は、大正と昭和の戦前戦後の全盛期を経てその後の観客離れから経営困難となり、昭和六二年八月の創立七十周年記念公演の後、同年九月七日に解散。筆者より一八歳年上の兄・山本紫黄が学生時代から熱狂的な「新國劇」ファンで、当然筆者もその影響を受けた。「水明」の周年行事で三度、「椿山荘」の本舞台で、「極付・國定忠治赤城天神山不動の森の場」の名場面を、紫黄が忠治、鬼之介が子分の定八になって演じ、大勢の来賓の喝采を浴びた。とりわけ、招待客の五所平之助監督から「素人にしてはなかなか上手い」と誉められたのが未だに印象深い想い出になっている。

発行年：1988年8月24日
発行元：新國劇記録保存会

『俳句四季』二月号

鬼の悩みごと

山本鬼之介

「水明」五代目の主宰を継いで早くも丸五年が過ぎた今、日々の俳句指導や出句作品の選などを通じての困りごとや悩み事が多い。

創始者である長谷川かな女の遺志を引き継ぎ、「各自が自己の個性を活かした俳句を詠む」というモットーが結社内部に浸透してきたのは結構なのだが、「有季・旧仮名遣い」という決め事や、作句する上で直面する文語文法のことなど、具体面での課題が多い。筆者が二代目の長谷川秋子の時に「水明」に所属して以後、歴代の主宰自らが右に記したような内容について云々したことは記憶に無いが、当然前々からあったことだと想定される。

筆者は、韻文たる俳句に不可欠な定型句（筆者としては五・七・五の他に七・七・五も加えたい）が放つ快いリズムを大切にすることを勧めており、当然のこと中八の句は絶対避けるよう指導している。しかしその逆効果として、中七に使われる下二段活用の動詞が連体形であるべき内容なのに、中八を避けるために中七で収まる終止形になっているものがあり、がっかりさせられる。その他に、句意を決定づけるのに重要な助詞の誤りや助動詞の誤用など、問題点を挙げ連ねたら限がない。図書館通いや文語文法の手引書と首っ引きでの独学の成果をなしている者と、指導者や先輩の助言を馬耳東風にしている者とで差が生じるのは当然のことだと思う。

これはここ一年ほど前からの現象であるが、投句作品の中に、不必要と思われる片仮名表記の句が度々見られる。筆者が抱いている片仮名書きの概念は、「外来語、外国人の名前や外国名の動植物の名称、外国の国名や地名、生物分類上の科に付ける名称など」に対してであり、それ以外の仮名書きは平仮名を用いて俳句を書き続けてきた。ところが、「茄子や胡瓜、熊や狐」などまでもが片仮名書きされた句が送られてくるので頭を抱えてしまう。

このような句については、納得のゆく理由が無ければ漢字か平仮名に添削しているが、何故このような俳句が目立ってきたのかが識りたくて周辺を探ってみた。劇画や演歌の歌詞などの影響かと思っていたが、それだけではなく、「公園の樹木や歌壇の草花の案内表示板の文字が殆ど片仮名になっている」とか、「表した言葉の語感を強める目的で片仮名を使う傾向が近年増えている」とかの話も聞きさらに納得がいった。併しながら、この様な手法を俳句の分野に取り入れるのは止めてもらいたい。日常会話やインターネットから取り入れた非文学的な言葉を使った俳句も然り。

先日いま文学界のいろいろな分野で活躍されている某氏に、「片仮名書きの乱用」について訊ねたところ筆者と同意見で、「とても苦々しく思っています」との応えを戴いた。筆者も、甲子園の高校野球大会で歌われる格調高い文語体の校歌を聴いて感動する老者の一人であり、漢字・平仮名・片仮名を正しく使い分けた俳句が永続する俳壇であってほしいと願う昨今である。

『俳句四季』二月号

石井喜恵句集『風を踏む』

刻を紡ぐ人

川村智香子

全体に平易な言葉で日常の暮しを通して素直に詠まれている。その眼指はどこまでも温かく、穏やかな人柄が感じさせられる句集である。

元旦や母微笑めば幼子も
芽柳や子の言ひ訳に幅ができ

親子の情愛が然りげ無く詠まれ子の成長を見守っている平和な家庭が窺える。

万緑や刻ゆるやかに太極拳
反す手のやさしき間合ひ盆踊

対象物を時間でなく刻を見つけて掬いあげている。

一句目、太極拳のゆったりした動作が、刻一刻とゆるやかに刻を押し進めていく。万緑の中での運動は、心身共に心地好いに違いない。

二句目。盆踊の句で手を表現するのは、数多ある。この句では、上五から中七にかけてのフレーズに注目する。一瞬を掴んでいる。

茎立ちや負ふこと多き膝踵
古漬を刻む八月十五日
つなぐ手の優しき時間夕桜

いずれも季語の働きが効いている。季語に語らせている。

一句目。年齢を重ねると膝や足に不調を来す。句を過ぎた野菜や花の茎立ちを、自分の身に引き寄せている。

二句目。糠味噌などの古漬を刻む行為と八月十五日の取り合わせが絶妙。先の大戦を思い、考えている作者。味わい深い句である。

三句目。しっとりした抒情的な句。手をつなぐ人同士は、親子、恋人と色々想像できる。

攫はれて行くならこんな春の風
陽炎の椅子に忘れし父の杖

虚実の絡まった不思議な世界。

一句目。柔らかな春の風に包まれ、一体どこへ攫われて行くのでしょう。

二句目。陽炎の椅子に、父は本当に座っておられたのであろうか。杖だけが残り、父は陽炎に消されたのであろうか。色々と想像できて面白い。

ここぞといふ刻のあり蛇穴を出づ

句集を出されたのです。熾火を胸に、今後のご活躍を楽しみに期待しています。

『俳句四季』三月号

今月の一〇句

石井喜恵

運転免許証を返納して１年が経つ。今、頼るは己が足のみ。ちょっとした買物でも気分は散歩。街角を曲り横道を入って行くと、未だ青い烏瓜が揺れていた。少しずつ色付くのを楽しみに今日も雑木の原に入って行く。

叶ふまで

磴百段袖の触れあふ初社
日のにほふ土に出でたる福寿草
鳴き龍の残響の廊淑気満つ
振袖の袂に消ゆる斑雪
帆柱の撓ひて立つや寒昴
盤上の一手に惑ひ春の雷
金泥の寂の襖絵春の宵
花冷えや風の研ぎゆく櫂の音
ゆるやかに翳りゆく山竹の秋
叶ふまで夢は追ふもの春の虹

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

砂利船のひろき澪巾寒明くる　卓郎
寒明の潟に棹さす孤舟かな　〃
寒明や飛び立ちさうな籠の鳥　順子
寒明くる島へ五分の連絡船　マスミ
散髪屋の先代からの鉢の梅　京子

——以上特選

春の霜そぞろ会釈の散歩道　喜恵
散髪の襟足なづる余寒かな　卓郎
寒明の光ゲにとんがり痛からず　舎人
散散な吾に立春大吉来　はるみ
やれやれと母独りごち寒明くる　由紀子
寒明や西暦で書く遺言書　節代
我に棲む鬼退散の豆を撒く　稀香
寒明や札所めぐりの前座歌手　徹平
宿酔の朝餉冒散と蜆汁　延昭
句碑の文字白く光りて寒明くる　治子
寒明やチェロ担ぎ行くハイヒール　マスミ
老木の枝先ぶくり寒の明け　千祐
泥濘に足をとられて寒明くる　京子
春立つや散骨を言ふ友元気　和葉
まだ残る風のとがりや寒の明　順子
散り散りに来てどつと去ぬ冬の鳥　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

春光やビルに飲まるるスペーシア　峰雄
氏神の手水やはらか春兆す　敏江
チューリップ黄色も植ゑた筈なのに　〃
恋猫の尾より恋して家を出る　竺仙
初雪が白き世界に落ちてくる　士史
ひきこもる人に届けんチューリップ　りこ
春光や亀の甲羅と太鼓橋　鶴城

——以上特選

子らの声絶えし校舎にチューリップ　いちい
春光や浅草らしく雑踏す　峰雄
橋の名は木更木橋と二月尽　竺仙
合鍵をあちこち探し二月尽　敏江
暖色の光吸ひ込み春と化す　士史
春日あび歩く幼児の足ふらり　りこ
寡婦となる友と惜春ロゼワイン　みどり
百獣の恋の目覚めやチューリップ　鶴城

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄 報

女生徒の風踏む素足寒の明け　千祐
ぬる燗や囲炉裏で語る八代亜紀　徹雄
立春のひかりの中の真帆片帆　順子
山際に鈍色の雲浅き春　雅夫
水仙を活けて今より修道女　萬蝶
寒明や貝殻骨が動き出す　康世
薔薇の芽に護身刀めく棘の影　昇

——以上特選

寒明や歌の出出しはFシャープ　千祐
寒明の小抽斗より古き鍵　理恵
凭るれば大樹のぬくみ寒の明　順子
ほどけゆく毛細血管寒の明け　萬蝶
寒明くる寺に祈願のをんなあり　星歩
一波乱二波乱あり寒の明　雅夫
何やらの胸のときめき寒明くる　康世
寒明けて残る余命に掛算す　喜久
白白と広がる家並寒の明け　徹雄
節々を組み立て直す寒の明　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修 報

雨風に耐へて枯木の力瘤　暦文

寒紅や真つ赤な嘘を然りげなく　延昭
寒紅を拭き心の鎧解き放つ　マスミ
寒紅と戯れてはなやぐ九十九髪　由紀子
立ち入れば幾何学模様枯木山　寛治
一切を放下の枯木仁王立ち　昇
枯大樹空に迷路を画くごと　喜恵

――以上特選　修

裸木の電飾映ゆるオフィス街　暦文
寒紅を引きて傘寿の遺影撮る　恵子
帽子とり会釈の紳士枯木道　玲子
わが齢ささへ寒紅色を濃く　昇
枯木星舷灯うるむ船溜り　寛治
枯木庭声筒抜けの隣家かな　マスミ
寒紅引き役に成りきる立女形　行雄
聞こえますか枯木が水を吸う音が　由紀子
忌明けの集ひ寒紅ぐいと引き　でん治
大空に大志をかかぐ枯木道　光子
電飾の派手によそほふ枯木道　翔太
枯木道童話のやうな窓明り　延昭
枯木山音なく過ぎる迷彩服　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江　河野はるみ　報

明日への命を孕む焼野原　玲子
せせらぎの水照をさそふ猫柳　玲子
川上は吾が産土や猫柳　美佐尾
暮れてなほ明るき水路猫柳　義子
ぬか雨に焼野の匂ひ鎮みゆく　宣子
関東の遠く富士置く焼野かな　水尾
縄文の火の匂ひかし焼野原　佐江

――以上特選

焼野まだ温みのありて暮れ掛かる　義子
猫柳べにさしゆびに頷きぬ　千祐
昼の月淡くかかりし焼野原　玲子
猫柳川面明かりにきらめけり　宣子
カルストに石の羊を置く焼野　知子
焼野原一望千里人は粒　美佐尾
すぐろ野の景は大きく息吹する　水尾
羊群原飛石のごと大未黒　はるみ
とめどなき水の饒舌猫柳　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶　石田慶子　報

薬喰ひ孔雀明王飛翔術　月を
白杖のリズムの響き春隣　京子
ハミングの君の明るさ受験終へ　慶子
指しやぶる胎児の画像春近し　稀香
沖目差す水脈のきらめき春近し　マスミ
春近したうたう出来た逆上り　千春
日溜りに溺るる猫や春隣　萬蝶

――以上特選

グランドに模擬の信号春隣　月を
次次と新たな芝居春近し　はるみ
ふり仰ぐ蠟梅の香や昼の月　稀香
農夫らの水路掃除や春近し　星歩
花屋へと家路の足が春隣　千祐
三寒の四温となるや明り窓　京子
明君を称ふる碑文風光る　マスミ
匂立つ土の湿りや春近し　千春
明眸の視線の先や春告草　佐江
三叉路を往き来の家鴨春近し　ひろこ
光明は破顔にありて実千両　鶴城
春近し市民農園抽選会　慶子
薄明をサイレン急くや寒の明け　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗　報

ほろ酔ふて狐拳など午祭　ゆら女
下萌や一山に満つ呱呱の声　〃
甕棺にままごと道具冴返る　道子
下萌やエンジンかかる農機具展　和子
弾む声揚がる絵凧は昇り龍　千津子
朝東風や淡路通ひのしるき水脈　玲子
長ぐつの赤鮮やかや雪解水　洋子

梅日和観音様に会ひに行く　早苗

――以上特選

草萌ゆる車輌行き交ふ操車場　玲子
尺八の音色も板に春の宵　千津子
獺祭や比叡嵐をゆくエイト　ゆら女
下萌や八十婆(ばあ)も夢を見る　洋子
少しづつ赤子の喃語水温む　和子
草野球春泥まみれの滑りこみ　道子
梅早し南紀の里の句碑傾ぐ　千枝子
草萌ゆるコンクリートの隙間にも　千世子
腰紐の縫ひ目なよなよ針納め　満耶子
マラソンをする向かう岸土手青む　きわゑ
下萌や若草山に炎走る　嶋田洋子
早春や前山の気の日毎満つ　早苗

昔話あれこれ36

『大鏡』大臣列伝　時平

荒人神(あらひとかみ)となった道真

大宰府で亡くなった道真の魂は、夜の内に北野に沢山の松を生やして筑紫から移り住んだ。

そこが今の「北の宮」と言う。

＊「荒人神」であるので、帝も行幸なさる。

（＊随時、姿を現して霊威を発揮する神。特に住吉の神。北野の神などの称。神は隠身を常とするが、人の姿となってこの世に現れた神とすることから天皇の称。広辞苑より）

筑紫の居所だった所は安楽寺と名付けられ、朝廷から別当や所司を任命している大層尊いお寺である。

内裏が焼けて度々造営したが、円融院の時代のことであるが、大工達が屋根裏の板にきれいに鉋をかけて退出し、翌朝来て見ると、裏板に何か煤けて見える所があり、梯子に乗って調べて見ると、夜の内に虫が食って文字の形をしていたのであった。

その文字は

作るともまたも焼けなむ
菅原やむねのいたまの
合はぬ限りは

（大意　造り直してもまた焼けてしまうだろう。棟の下の板の間が合わぬように、道真の胸の痛みが治らぬかぎりは）

と読めたのであった。

道真公が詠まれたのだろうというもっぱらの噂であった。

時平の善政

醍醐天皇は贅沢を規制しようとなされたがなかなか守られなかった。

そんなある日、時平が禁制を破り、特別きらびやかな衣装で参内した。

天皇は非常に立腹され、早々に退出するよう申し渡された。

時平は恐懼して直ちに退出し、邸の門を閉ざし、一か月の間御簾の外にも出ず。謹慎の意を表した。

これを機に贅沢の風習がなくなった。実は帝と時平が示し合わせてやったことなのであった、

時平は、道真死（903年、2月25日、五十九歳）後の七年後の延喜九年（909）四月四日に三十九歳で死去した。

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

めだか句会（浦和）

猫の恋大佛次郎記念館　久夫
春の日やふと口の端にケセラセラ　知子
すり鉢の加減はいかが木の芽和　妙子
宿老の戻らぬ記憶春の泥　とも留
いぬふぐり古事記ゆかりの道を行く　敦子
春きざす元素記号の並ぶ表　六弦
名の木の芽張りたる札を脱ぎたれば　月を
春日や微動だにせぬ竿の先　鶴城
うららかや日に日に落つる記憶力　はるみ
木の芽張る満開前の大仕事　三茅

若鮎句会（浦和）

春の日や路地いつぱいの電車の絵　秀子
昇進や板場に届く桜鯛　芳春
をさなごのひたひに憩ふ春日かな　ひとみ
雉鳴くや母は涙を流さない　拓真
春の日に魚影群れ寄るおぼろ船　道郎
小抽斗開けて閉ぢて春ひと日　順子
見渡せど修羅場の廃墟春いづこ　真
雉消ゆる貴人は裳裾長く曳き　稀香
晴の日や土竜のつそり外回り　貴
梅が香や上野の森に弓場の黙　月を
春の日や牧の牝馬の競ひ駆け　鶴城
春の日や名さへ忘るる昼時分　喜夫

若枝句会（浦和）

偕楽園梅見に浮かれ腹満つる　みどり
銀鼠の祖父の山高猫柳　貞代
「いい匂い」梅見の君に風笑ふ　泰生
赤芽脱ぎわが世謳歌す猫柳　敏江
梅見茶屋啜る茶の湯に香の溶くる　泰子

小梅の会（浦和）

初凪や十分間の渡し舟　隆文
去年今年そのまん中に我ありて　恵子
冬萌や手を握り合ふ老夫婦　進
氷見鰤や醤油をはじき箸進む　隆然
初松籟ビルの隙間に小さき富士　道を

新樹の会（浦和）

鎌倉の潮鳴り幽か実朝忌　徹雄
桂林の冬の景観水墨画　平通
永き日や婦人画報の美食記事　道を
春惜しむ我が青春の映画館　清吉
梅が香やイーゼル立つる豆画伯　修
裸体画にハレムの匂ひ三鬼の忌　風子
大樹とて寄らば潜む魔実朝忌　鶴城

水明鬼石句会（鬼石）

親子大工響く金槌日脚伸ぶ　和子
畑のすみ一歩前進蕗のたう　ナヲ子
二歳児の二礼二拍手節分会　聡子

若楠句会（浦和）

能登の地の仮設住居や春浅し　葉子
春浅し窓を磨いてティータイム　真由義
うららかや土曜の午後の日本橋　直子
八つ橋の板の端端春浅し　風舎
キッチンの蕗の薹もう乾いてる　京子
春淡し肩を寄せ合ふ傘一本　鶴城
何思ふ芽吹いた能登の蕗の薹　宏治

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

寸止めの空手の組手春浅し　延昭
春浅し餡のはみ出す人形焼　美枝子
薄氷に鯉の目ん玉浮き上がる　倶子
二杯目の酒はホットで春浅し　健司
薄氷を割りて馳走の一夜漬　昇

円卓の会（浦和）

花辛夷八十路の坂を上がり初む　修
再会の笑顔の能登や春きざす　静香
菊菜花千代田区千代田一の一　月を
春風に舞ふ袋にも生まれあり　拓真
水菜を濯ぐ細き指先ほの紅し　京子
京菜茹で東京のこと京のこと　道を
春めくやハローキティにあへる街　亮一
初蝶や明日入院の吾と戯る　輝翠
畦道や郷土の春をうたがはず　翔太
高窓に春の眩しさヴィヴァルディ　鶴城

たかんな俳句会（川口）

春一番花粉飛散に先越され　謙一
遠く来て春一番に身を任す　のり子
美しき袂をぬらす春の雪　福美
浅き春美脚の人ゐる二番線　小麦
門の緩む裏木戸春一番　義子
墨滴の滲む美濃和紙春浅し　鶴城
春一番湯島天神女坂　水尾
春きざす爪にも花を美爪術（びそうじゅつ）　静香

俳句の手ほどき（岩槻）

姫路城千の狭間より木の芽風　佐江
半島は春一色に海青し　水尾
天守にも瀬戸の潮の香冴返る　義子
朧月ダムの宿直（とのゐ）は四畳半　徹平
ゆつたりと堀行く舟や城の春　翔太
春光の届くや半跏思惟の像　幸代
半生を日日回想す二月尽　久美子
黒門の大き門梅一輪　忠男
半襟に大正ロマン春の傘　桂子
天守から古き街並木曽の春　美子
梅東風や明けて半寿の二従姉妹（ふたいとこ）　卓郎
小半を下地に銀座春の月　延昭
麦踏の足取り軽し巻脚半　チアキ
半衿は白と決めをり早桜　かつ子
春祭赤い声とぶ若頭　徹平
ミモザ咲く入江の里の海鼠壁　卓郎
のどけしや庫裏に大黒般若湯　風子
銀色の葉かげミモザの小房ゆれ　秀子
花ミモザ白磁の壺にあぶれけり　道を
ミモザ咲く老女ひとりの佗び住ひ　燈女
風はまだ尖つてをりて二月かな　茂子

水明熊谷句会（熊谷）

遥かなるものに二月の月と母　栄子

皐月の会（浦和）

空焼けて公魚焼ける湖上かな　山菜
手の糸にびくびく躍る雀魚　更穂
寒明や湯のこまやかに旅の宿　光代
ややこしき用談済ます春寒し　珪子
長閑なりさらさら流れ用水路　順子
公魚の釣れゆくままに陽が沈む　紀子
春の鳥パティシエの夢実現す　静香
寒明の薄明待つや月と星　暦文
春ショール少しずらして娘は出かけ　美佐尾
大阪の女豹かしまし春ショール　きいち

神戸大池句会（神戸）

海苔簀の沖を海鳥掠め飛ぶ　玲子
国生の島へ白波春浅し　千津子
選ぶ愉しみバレンタインの猪口齢糖　早苗

水明澪つくし句会（大阪）

初午や年相応の折れ財布　人美
下萌や思ひのほかの色の濃さ　洋子
下萌と枯れゆく影の交差かな　智恵子
初午やお山に赤い風が吹く　ゆら女

野ばらの会（浦和）

春の土天地返しの鍬の先　秀子
道草の靴の運びぬ春の土　栄子
リハビリの母を待ちゐる春の土　夏江
牛二頭育てる里の春の土　茂子
土匂ふ花壇の手順活き活きと　みき子

山茶花（浦和）

ものの芽に元気をもらひ生きていく　美江子
ものの芽の呟きを聴く野の仏　マスミ

蝌蚪の会（浦和）

春浅し山からおりる風の声　風舎
厚き葉を押しのけ椿咲きにけり　さち子
春浅し脱ぎし靴下見つからぬ　元美
椿咲く大島の海波高し　しるく
春浅し暮鐘遠くに一人酒　礼子
白椿ふはりと添へむ遺影横　英子
女子校の乙女椿は大らかに　ひさの
失くしてしまつた隠し釦や春浅し　月を
春時雨暮色の迫る下山道　鶴城
暮れなづむ藍に染まりし春の湖　宣子

芙蓉句会（浦和）

冴返る香炉の灰の筋目かな　税子
寒戻る客に詫びいふ女将かな　仁
汚染水の人為的ミス冴返る　美子

若狭水明会（若狭）

大根やタカラジェンヌの足高し　寛久
ともかくも息災であり初山河　保人
友の背を追ふ尾根道や雪しまく　八重子
初景色神の創りし三方五湖　笑風
八方を睨む青龍初景色　ことは
雪しまき兄のうしろを一歩づつ　祥子
雪しまき先が見えぬと言ふ不安　郁子
雪しまき座骨神経尖りたり　初花
雪しまきのつぺらぼうの字小字　和風

櫟の会（浦和）

歳月を咲き尽くしをり枝垂れ梅　裕誌
朝東風や一駅歩く通勤路　富子
東風吹きて帰る故郷まだ遠く　文子
神神し白一輪の梅古木　治子
東風吹かば栞差し込む旅行本　あつ子
白梅に夜明けの色の加はりて　朋子
強東風や声の届かぬ測量士　千重子

珊瑚の会（浦和）

出港の水脈（みを）の輝き春の海　水尾
大八洲浮かべ揺蕩ふ春の海　昇
尼寺の屋根高からず春の海　光子
ミステリーのどんでん返し春の海　恵子
嫋（たを）やかに灯台を抱く春の海　史代
釣舟の漂ふてゐる春の海　広子
沖波の螺鈿に光る春の海　和子
思ひ切り春の渚を靴脱ぎて　和葉
朝市の婆がすすめる花菜漬　かつ子
鎮魂の波ゆるやかに春の海　喜恵
朝市や手皿に受くる花菜漬　マスミ
並足の馬を横目に春の海　節代

鶴川山百合句会（町田）

水仙花美人同志は背きあひ　雄二郎
四五枚の蛇の舌先水仙花　月を

野水仙挙つて海へホルン吹く　喜久
汁粉食ぶ膝を崩すも女正月　史代
水仙や沖を小樽へ向かふ船　広子
水仙の眺めてゐるよ通学路　由美子
地震の地にせめて水仙香を放て　千春
水仙や暮色にきみの溶けくれば　萬蝶
プライドの高き女の弱音水仙花　理恵
そのすがた自惚れてよし水仙花　美千子
味噌汁の匂ひ漂ふ寒蜆　うさぎ
群れ咲くも意志それぞれに水仙花　玲子

きざきサークル（浦和）

言ひ淀む医師の一言冴返る　昇
「サムライ」町の木の芽田楽串長し　光子
冴返る胃の腑を探る内視鏡　啓子
解体の重機の響き冴返る　倶子
冴返る階段軋む坊泊り　健司
冴返る中州に立てる鷺一羽　和
こつこつとヒール早足冴返る　和子

あゆみの会（浦和）

下萌や小さき社に大願を　倶子
校庭に小さき土俵や鳥帰る　啓子
下萌に気持高ぶり足早に　山遊
草青む鳩の寄り来る木のベンチ　和
花壇から摘み取る花菜教卓へ　重子
学帽を目深に被り大受験　藻好

和歌山水明句会（和歌山）

採血の巧みなナース春立つ日　和子
野火走る煙草踏み消す消防士　道子
アロエ咲く南紀の浜の無人店　千枝子
短文の欠席ライン花冷ゆる　千世子
流氷に囲まれ喘ぐシャチの群れ　満耶子
ぶらんこ漕ぐ半寿の力試すなり　きわゑ
寒鰤にちびりちびりと一人酒　洋子
焼山と五重塔に乾杯す　廸代

青葉の会（浦和）

野ざらしの長谷の大仏春時雨　和子
定位置で市民マラソン春びより　洋子
自家製の蕗味噌を出す定食屋　真理
苗を植ゑまさに恵みや春時雨　美智枝
定小屋の跳ねて夜道の梅の花　輝翠
早春の八丈島へ定期船　美子
春時雨定刻を過ぎバス来る　美紗子
菜園に御湿りとなる春驟雨　啓子
土手道やぬれて行きたし春しぐれ　公子

繭の会（浦和）

軽トラに鋤鍬踊るけふ雨水　和子
猫の恋修羅場くぐりてすまし顔　伸子
しばらくは頭（かしら）を傾（かむ）ぐ春の鳥　風舎
山を背に生業ひとり雨水かな　さよ子
春の鳥月の探査機動き出す　まりこ
一人居の庭をにぎはす春の鳥　夕峰
苔寺にふくらみ戻る雨水かな　珪子
雨水かなまあるい風に川光る　律子
三羽目が狭庭に着地春の鳥　小麦
けふ雨水京より届く経机　風子
春の鳥縄張りといふ空画（かく）る　月を
柏手の揃ふ境内雨水かな　鶴城
校庭の楠春の鳥集ふ　京子

りんどう俳句会（浦和）

止むまでの間合ひ宜しき春の雪　寛治
水門へ土手は直線草青む　君夫
のびのびと素直一番葱坊主　弘夫
幼には宇宙に見ゆる犬ふぐり　治子
追憶の花一匁いぬふぐり　風子
膝折れば息吹く一叢いぬふぐり　徹雄
古民家や祖父直伝の紙を漉く　翔太

真知子巻して人を待つ春の雪　順子
動乱の世を宥むる如く春の雪　まり子
一言に心ほどけて春の雪　夕峰
旧道に種苗屋二軒いぬふぐり　卓郎

櫻蔭句会（浦和）

午祭奉納の朱立ち並ぶ　美子
初午や煮しめてうまし根野菜　茂子
夕空に黄色溶け出すミモザかな　千恵
初午の太鼓笛の音白狐の面　多美子
初午にどつと人出のお稲荷さん　公子
厳かな園児の舞や午祭　真理
初午の供物に飴も露地稲荷　由紀子
シュテファンの鐘響く街花ミモザ　行雄
祠にも供物整へ午祭り　久美子
ミモザ咲く煉瓦の家を目印に　美智枝
下野の初午母の鬼おろし　幸代

雛の会（浦和）

風二月手ぐしで足りるだけの髪　燈女
手を貸して渡る吊橋雪解風　喜恵
手を繋ぎ踏み出す一歩能登の春　公子
足元に一枚掛くる霜夜かな　チアキ
園児らの土手ころころと春隣　輝翠
神殿を毀すごと踏む霜柱　佐江

野菊の会（与野）

白梅紅梅木佛金佛なまめかし　美代子
昇り龍の形のわが国花だより　和子
棒のごと五臓六腑の寒の水　清子
うららかや卵黄二つ福二つ　光子

芽吹句会（浦和）

春立ちて杜に呼応の鳥たちよ　千重子
立春の路地賑やかに手毬唄　玲子
浜千鳥ひねもす波と戯れぬ　修
梅が香を纏うて去ぬる東慶寺　富子
待望の休息得たり臥竜梅　チアキ
さざ波の浅瀬に遊ぶ浜千鳥　久美子
浜千鳥鎌倉幕府に治水策　ひろこ
一心不乱波打際の浜千鳥　道を

りそな俳句会（浦和）

出張帰りの我が家の灯り冬暖か　久美子
霜焼を知らぬ耳朶イヤホーン　暦文
霜焼の手に追討ちの水仕事　道を
じゃんけんのぱあは霜焼あからさま　寛治
お湯割りの備前焼持つ手冬暖　建治郎
暖冬の見沼たんぼで大あくび　勲
霜焼の耳は福耳地獄耳　マスミ
霜焼の手に容赦なき家事炊事　雅夫

柿の木塾（浦和）

春光や阿修羅の指の薄埃　昇
蕗味噌を愛づる歳なり山の宿　恵子
春光や新造船の槌の音　水尾
春光や石に休みぬ旅の人　節代
群れ鳩の朝の旋回春の色　かつ子
トーストの淡き焦げ目や春匂ふ　和葉
蕗味噌や母の想ひ出よみがへる　章嘉
蕗味噌や父と私は似た者同志　和子

ミモザの会（横浜）

早春の母待つ杖に根付け下げ　慶子
早春や土手にてんてん動くもの　亜弥子
早春の景を駆け抜く車窓かな　詠子
春早し紅差指で味見する　萬蝶
早春のをさなの笑顔ぴつかぴか　美千子
スニーカーざくざくと踏む霜柱　栄子
早春の発車メロディー円舞曲　玲子
早春やパン焼く匂ひ家に満つ　史代
早春のミニより伸ぶる脚白し　千春

水明通信

秩父観音霊場総御開帳

菅原卓郎

来る令和八年三月から十一月（期間は未定）で、秩父三十四観音霊場の総御開帳が行われます。一番四萬部寺より三十四番水潜寺迄総延長距離約百kmの巡礼路です。

札所巡りの起源は、甲午の年文暦元年（１２３４年）とされております。観音様の眷属である馬に因み、十二年に一度午年に総御開帳とし、三十四寺の秘仏を納めている厨子の扉が開かれます。秘仏の観音様の手とは、祈願塔を介した「お手綱」で、手をつなぐことができます。

三十四札所は一度回りましたが、巡礼路は平坦な箇所は少なく、特に三十番以降は寺間の距離が有り、アップダウンもきつくなりますので、日々の養生が欠かせません。

尚、２０３４年は秩父札所開設八百年祭が予定されております。

水明通信

パリのすずらん売り

反町　修

毎年4月から5月にかけて自宅の庭の片隅にすずらんの白い、可憐な花が咲きます。これを見るとパリ駐在時代のすずらんの日（5月1日）のすずらん売りを思い出します。

すずらんはユリ科スズラン属の植物で釣鐘型の小さな花を咲かせます。花は芳しい甘い香りがします。花言葉は幸福の再来、幸せをもたらす花等です。

フランスには大切な人にすずらんの花を贈り合う慣習があり、5月1日をすずらんの日（jour de muguet）と定めました。この日はメーデーでもあり休日です。すずらんの日には花屋としての営業許可がなくても誰でも子供でもすずらんの花を売ることができます。花屋にはすずらんの花が溢れ、またたくさんのすずらん売りが街に現れ歩道に小さなスタンドを立てて森で摘んだすずらんの花を売っています。更に道路の信号の手前には手に手にすずらんの花束を持って少女たちが赤信号で止まっている自動車のドライバーに声をかけています。かわいらしい少女の目と合うとついつい買ってしまいます。

今度の5月1日にみなさんの大切な人にすずらんの花を贈ってみてはいかがでしょうか。贈られた方は、幸せ！と感ずることでしょう。すずらんの花は porte-bonheur（幸せを運ぶ）と言われています。

俳句

5月号予告

4月25日発売

予価1,300円(本体1,188円)⑩

巻頭作品50句 小澤 實

作品21句 岩淵喜代子・星野高士

大特集

微妙なラインを探る

秀句と凡句の違い

▼総論 秀句と凡句を分ける微妙なライン…奥坂まや

▼各論 平明／暗喩・象徴／実と虚のあわい／虚／写生／都市詠／自然詠／遠景／クローズアップ／口語／俗

句集特集

日本の俳人100

荻原都美子句集『至恩』

第18回 角川全国俳句大賞発表

別冊付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年5月号

特集 「百鳥」30年の軌跡

○「百鳥」主宰・大串 章インタビュー

○大串章自選30句

○論考～大串章の世界 太田土男

○エッセイ 八木幹夫

○一句鑑賞～大串章の各句集から

甲斐のぞみ 池田ブランコ 望月 周

西口麻里 青池 亘 藤井智恵子

平田倫子 北川玉樹

○創刊当時の思い出 森賀まり

○「百鳥」作品抄 抄出・石崎宏子

○「百鳥」の主な歩み 望月 周 ほか

〈グラビア〉俳句界NOW 石寒太

特別作品21句 波戸岡 旭「天頂」

発表 第16回文學の森賞

第25回山本健吉評論賞

私の一冊 今井 聖「街」

※セレクション結社 「樸」恩田侑布子

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

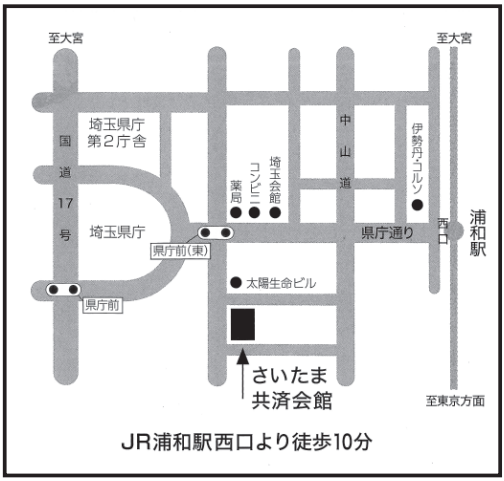
株式会社 文學の森 お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

水明全国大会のご案内

［と　き］　2024 年 6 月 29 日（土曜日）
［ところ］　さいたま共済会館
［行　事］　かな女賞・季音賞・水明賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰
新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と表彰、講評等。

申込書、参加費、大会兼題句募集、親睦会、締切など詳細につきましては５月号に掲載いたします。また申し込みにつきましては５、６月号に添付の参加申込書を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは６月 15 日までにお願い致します）

水明俳句会　全国大会実行委員会



全国大会会場
さいたま共済会館

風　声

○**俳句四季**二月号――「季語を詠む」欄

そそと明く旧家の庭の木の根かな　**鬼之介**

○**現代俳句**二月号――「第十五回現代俳句の風より」

池田澄子選による秀句五句鑑賞に

口寄せに呼ばれざる魂虎落笛　本橋稀香

○**現代俳句**二月号――「第十五回現代俳句の風」欄

寒卵「苞」の字ワープロ登録す　菊池ひろこ

早暁の凍雲の海夢捨てず　梅澤輝翠

じやれ合ひて家族写真や千代の春　大塚茂子

足早に暮るる山の端冬桜　越田栄子

口寄せに呼ばれざる魂虎落笛　本橋稀香

○**現代俳句**二月号――「翌檜篇――青年部　編」より

「まやかし」　吉川拓真

一頭買ひの牛のバーガー寒き夜

椅子は人を待つ冬夜のアイスティー

ストローの屈折したる暖房裡

冬ざれや薔薇の造花に深き陰

小雪や誤写写真なる芸術家

木星と月の接近おでん鍋

酔はなくとも良し冬の灯はまやかし

朝となりポインセチアの赤と知る

略歴

一九八八年埼玉県生まれ。埼玉県さいたま市在住。

「水明」同人。「こんちえると」所属。

○**くぢら**（中尾公彦主宰）二月号――「受贈俳誌美術館」欄

三弦の三種の調べ大旦　**鬼之介**

○**好日**（高橋健文主宰）二月号――「受贈誌御礼」欄

ぬけぬけと一人三役村芝居　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞代表）二月号――「受贈俳誌紹介」欄

霧の浜町江戸と覚しき常夜灯　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）二月号――「受贈誌御礼」欄

離れ家の琴を聴きつつ松手入れ　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）二月号――「諸家近詠」欄

離れ家の琴を聴きつつ松手入れ　**鬼之介**

○**白鳥**（高松文月主宰）第七〇号――「受贈俳誌より」欄

新装の花屋にとどく秋の草　**鬼之介**

（日髙道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和六年二月二十九日現在―

山本鬼之介 50口
霜多光代 10口
松井由紀子 10口
田中章嘉 3口
森本早苗 10口
五明　昇 10口
新春俳句大会より
石井喜恵 1口
青木鶴城 2口
岡田宣子 1口
染谷風子 1口
河野はるみ 1口
丸山マスミ 1口
大塚茂子 2口
日高道を 2口
反町　修 2口
小林京子 1口
正木萬蝶 30口

保坂翔太 1口
下川光子 1口
石田慶子 1口
茂木和子 2口
加藤でん治 1口
福田千春 10口
梅澤輝翠 1口
越田栄子 1口
門真宏治 1口
熊倉千重子 1口
柚木治子 1口
横山礼子 1口
羽島秀子 1口
水明忌大会より
星野和葉 10口
清水桂子 2口
丸山マスミ 1口
石井喜恵 2口

染谷風子 1口
保坂翔太 1口
日高道を 2口
曲淵徹雄 2口
河野はるみ 1口
小林京子 1口
反町　修 2口
岡田宣子 1口
小倉倭子 3口
大塚茂子 1口
西幅公子 1口
田中章嘉 2口
内田恵子 3口
梅澤佐江 2口
熊倉千重子 2口
茂木和子 1口

―合計201口―

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　　主宰　山本鬼之介

［指導者］ 網野月を
［作　品］ ５句　［受講料］1,000円
［方　法］ ①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］ 網野月を　　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸 1-31-2

後記

今年も桜の開花が早いという予報でしたが、寒の戻りがあったりして、例年通りの開花に、いやむしろ遅目でしたので、卒業式や入学式に、間に合って、お喜びが増した処もあったようです。

去る二月二十九日に行なわれた水明忌では面白い事がありました。水明忌で一位天に輝いた日高道を氏も、本号の水明忌の記事にお書きになって下さいましたが、当日は主宰を含めて四十一名参加でした。一人二句出句で八十二句です。ところが配られた清記用紙は八十三句。不思議だなと思いましたが、誰方かが三句お出しになり、あとで判明すると思いました。

三人もお取りになったその句は誰方も名乗られません。ついに主宰選となり、主宰は詠み人知らずの句を頂きましたと言われて、お取りになりました。しかし、誰方も名乗られませんでした。

如月忌やら色々な会に長い事出ましたが、このような事は初めてです。出席者一同不思議に思いましたが、主宰の詠み人知らずの言葉に、皆様大笑い、楽しい会になりました。

きさらぎや復興遅々と能登地震
詠み人知らず

只今、各賞受賞者の選句の真盛りです。水明五月号に、全て発表される事と思います。受賞される方は勿論ですが、まわりの方々も全国大会にお出かけ下さいませ。年一度の大会は、全会員の交流の場でもありますので、大変でしょうが、地方の方も、新しく会員になられた方も、是非ご出席下さいませ。

二月号、三月号に季音と水明欄の書き方を掲載した所、鉛筆書の方や赤丸のつけ忘れ等が、減ったそうです。また、近ごろ、郵便の配達が遅いので、お早目の投函よろしくお願いします。（節代）

今月のはてな？

	頁
花木筆（はなこぶし）	16
斑雪（はだれゆき）	19
光ケ（かげ）	20
鋤簾（じょれん）	26
一杯（べくさかずき）	34
水糸（みずいと）	36
小晦日（こつごもり）	〃
一臂（いっぴ）	63
臂（ひじ）	〃
諧謔（かいぎゃく）	〃

水明発行所受付時間
（048−822−4741）
曜日：（月・火・水・木・金）
時間：12時半〜午後4時半
（土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和六年四月号
通巻一一二三号
令和六年四月一日発行

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話 048−822−四七四一
ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三
発行人 山本鬼之介
印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

季音　雪・月・花

六月号　四月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

水明集

七月号　四月二十五日締切

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

七月号　四月二十五日締切

四月の兼題「残花」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）	

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

煉瓦塀に春遠からじ港町　網野月を
手相見に小さき日溜り初天神　石井喜恵
矢狭間より射程の距離や春の鴨　石山かつ子
焼山と五重塔に乾杯す　大橋廸代
寒の明け西暦で書く遺言書　大村節代
紅梅のひとひらを摘むあどけなさ　小倉倭子
水仙や沖を小樽へ向かふ船　町野広子
立春のひかりの中の真帆片帆　大場順子
姫路城千の狭間より木の芽風　梅澤佐江
立ち入れば幾何学模様枯木山　高島寛治
秘薬めく寒紅母の手筥より　松井由紀子
つばくろの一閃天地返しかな　池田雅夫
春きざす爪にも花を美爪術　野田静香
蝋梅や水占ひに吉の文字　檜鼻ことは
春は曙だみ声で鳴く裏の鶏　河野はるみ
京菜茹で東京のこと京のこと　日高道を
春光や亀の甲羅と太鼓橋　青木鶴城
立春や飛び越えてゆくにはたづみ　石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

寒林の踏み入る先の瀬音かな　新暦文
可杯で享くる年酒の無礼講　菅原卓郎
冬の蝶二頭で飛んでゆきたまへ　菅原真理
初夢や幼き頃の家の間取り　岡田宣子
初景色ただ一筋の雲を追ふ　篠﨑紀子
初富士や明日は箱根へ勝ちに行く　小林京子
元旦の澄みわたる空とこしへに　山岸久美子
やがて来る季節の遣ひ福寿草　元田亮一
床の間の脚光のごと福寿草　反町修
風花や天界からの散華とや　清水桂子
凍蝶やうすむらさきに透けゆけり　西幅公子
海と城ともにある町初景色　丸屋詠子
亡者送り電気ブランは三杯目　皆川更穂
初景色門を入らぬ象の尻　森下山菜
水仙や初めて触れし白き指　千坂平通
しののめや破魔矢の鈴のかろき音　池田珪子
人波に飲まれ浅草切山椒　阿部幸代
早梅や稚のほつぺの紅濃やか　霜多光代

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和六年四月一日発行　毎月一日発行
（第九十七巻　第四号）　定価　一〇〇〇円